34-124
34
344
明治十九年六月八日寄贈

緒言

凡そ人たるもの其分限を知らざれば如何に邪悪なることとしいへどなゝるなきに至らんとは古き聖も言ける如く實に世の中の人々のそが分限を善くも守れば世に忌まはきとはあるまじ偖て我大御國の婦女達は古よりの風習せりて男子を敬ひ順ふを以てそが分限となしたれば女子は故さら物學びなどなすはいとも稀有なることにぞありけるさるに近頃世運の漸く開け進むに随ひ女子の教も苟且に見做すべきにはあらぬを悟りそが嫩芽をば萌しはしつれど未だ絲の色をもなさずいと幼けなき折と云ふべし非然るに婦女子そが中までも少しく文字を讀み得るものは遙かに自負の心を起し天下の人々悉く己れに如かざる心

地かつ且異國に行る丶同權（男女）說を聞き誤りて妄りに男子と輕んずる中にも最とも甚はだしきは一生配を求めずして其身を終ふるを操となすなどいとも鳴呼なる婦女子達夥多世間に見るに至れり左れど余等は一概に鳴呼なると丶排くるにはあらず彼れも人なり我も人なり男女の別はありとはいへど同じく人に異なるなければ妄りに男子に屈從してそが女僕となるなきは最と喜す可きことにはあれど夫の歐洲婦女の見識なく又其が學識もあらずして只かの身分とのみ得んと希ひ終には男子を侮る如き其性質温柔なるに似合はしからぬことをなすは實にも忌むべく嫌ふ可きことにぞありける此書は西暦千八百七十六年英吉利國ブラッセー女史が高才博學の身にありながら尚ほも智識

を擴めんと萬里の波濤を事ともなさで廣く世界を歷周してそが見聞を書き綴りたる一小冊なれど歐洲女子の氣概學識我が今日の婦女子達の企て遠く及ばざるその一班を伺ひ知るに便りよければ一は我國婦女子達の自負の心を薄らがしめ一は益す〳〵奮激せしめ又世の女子を輕んじて奴隸の如く思ひける僻見男兒の夢を攪し男子も女子も各身の分限を能くも覺り世に忌はしき事なかれかしと身の拙なきをも打忘れ瘦筆取りて飜譯しぬ書中瑣末の事又不要なることは之を除き其意の足らざるは之を補へり是れ一つは空しく看客の倦心を來し一つは其意を得られかぬるを慮りてなり且人名は左傍并行線を畫し地名は左傍單線を畫するが如きは世上一般の習慣に從ひたれば看客

我輩の微衷を諒しそが譯述の拙なきを咎め玉ふてとなかれ左すれば譯者の幸ひ此上なからんと爾か云ふ

明治十九年五月　芳溪生　内田彌八識

婦人地球週遊記

英國　ブラセー女史著述
日本　内田彌八譯述

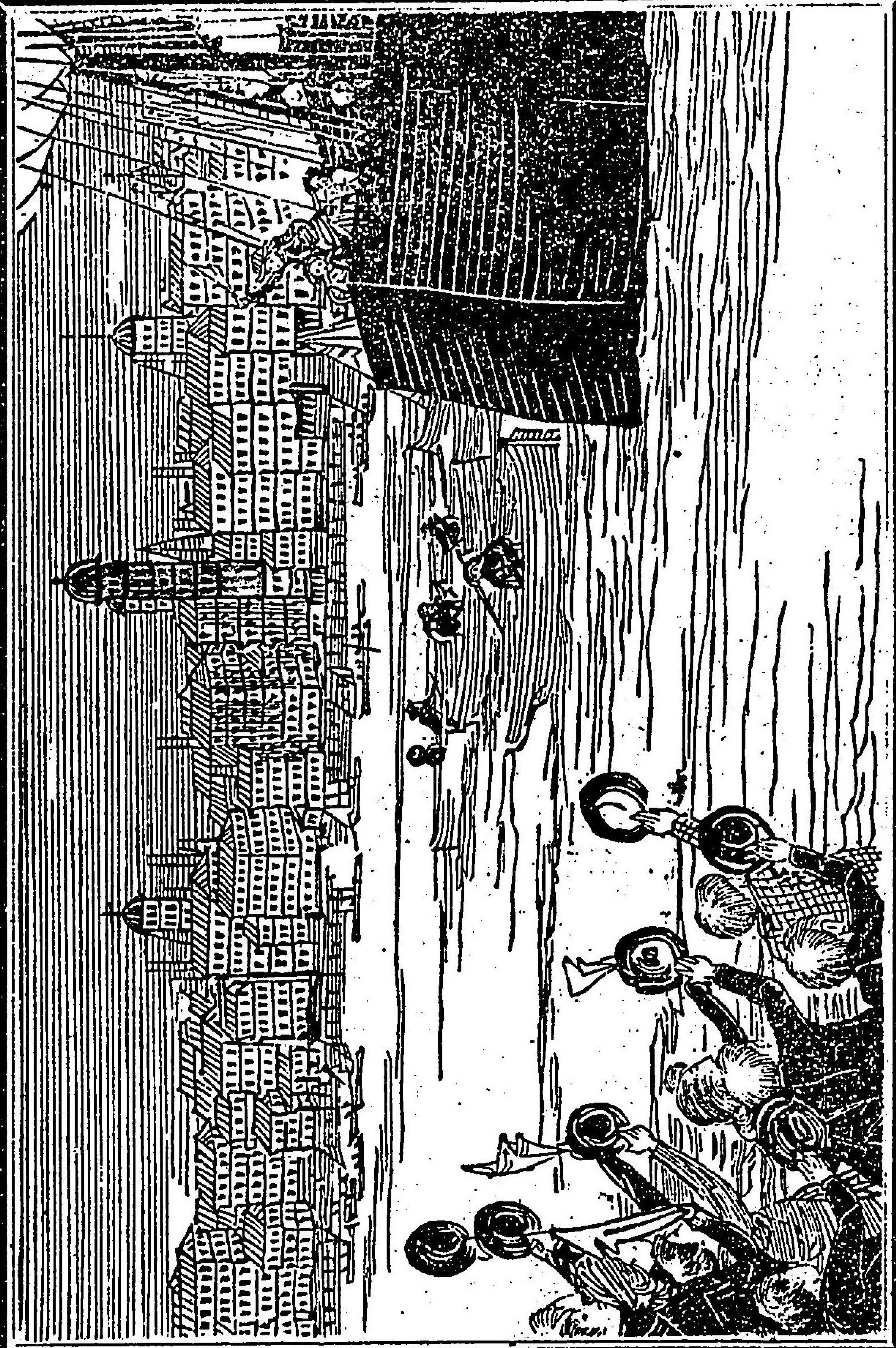
第一回

一聲滊笛辭二故郷一
萬里鵬程自レ是始

旭影輝やく旗は英吉利の章を風に飜がへす船は千艘二千艘陸には夥多の豪商大估甍と并べ軒を連らね軌る車の轍と轄行き通ふ人の肩と肩を肩と并ぶる繁榮は世界の中にも類なく見るさへ眩ゆき有樣は最とに畏しこき皇の宮居まそ〳〵我國の華の都と世の人の言ひ以てはやす倫敦なり妾も天の惠を受けて斯る都會の其中に月日を送る事を得たれば只管上天の恩惠を謝し餘念を出さであるべきも

のを實に人間は欲知らず妾も人の欲には漏れず廣く此の世の國々を彼方此方と經廻りて名所古跡は言ふも更ら土地の人情風俗なんど事落もなく探り得ば是にましたる樂あらずと思立ちては猶豫られど豫て已れの見識りし人々に告げ謀りしに中には妾の企の餘りに女に似氣なきを笑ひ私語めく人もありしが妾は之に氣を撓まさず心を勵まし人々に勸めし事の甲斐ありて終には夫れ等の助を得愈よ萬の國々を探る旅路に就く事に心の確と極りしかば妾の欣び比へ難なく頓て用意を調へて吉日をこそ待たりけり此度妾の航海の用に充つ可き滊船をば名を三微無と稱へしものにて左程大きやかなるにはあらねども噸數五百餘りの量を容れ馬力十に近き力を備へ結搆甚たく堅けれ

ば扨こそ妾の運命も此れなる船は運命に任するとはなしたりぬさて此船の船長初め水師水夫に至るまで何れも健氣の壯士にて又た善く術に妙へなれば甲斐〴〵しくも妾のため万里の波を蹴破り呉れんと諾ふたりしぞ賴もしけれ斯くて旅出の日となりしかば知人友人諸人の暫の名殘告げなんと訪ひ來る人の數多きも一々握手の禮了りて頓て妾の家を出で港の方へと向ひしに送る人々後より前より妾を押し圍み或は別れの難きを歎ち或は妾の無事を祈り或は波路の險を說き遉は知人の懇に談し合ひつゝ行く間もなく埠頭にこそ着きたりぬ斯くて暫らく休息し舟場に打出で見渡せば待設けたる舟は檣狹しと旗飜へし粧ひ極めて亮々と吹き鳴る滊笛の聲諸共此方を指して進



み來りぬ左れバ妾も諸人に別れを漸く告げ果てゝ小舟に打乘り本船に後をも見向かず乘り移りしに陸に當りて躍然めく聲の響く計りに聞へしゆゑ甲板上に打登り後の方と見渡せバこれなん送りし人々の帽を手高に振り上げて最後の別れを告げしありけり斯れバ妾も双手を擧げてよゝと叫びて答へしつれど退に名殘の惜まれて飽かぬ心を行く船は白浪蹴立てゝ達無斯の河を下流へと走り行けバ次第に遠く故郷の華の都も行く船の吹き匍ふ烟と消亡せて水天一色限りなき滄海原へと浮出しが船は此日の夕晩れに達無斯河の河口なる西耳熱斯の港に着ける頃しも一千八百七十六年七月の一日にて是ぞ妾が千万の長き旅路の荒海と航り初ねる日にこそありけれ明くれバ七月二日

の暁先づ第一に大西洋海の中なる一孤嶋に保耳三土嶋に趣かんものと船は艦と南へ向け徐々と進行たりしに漸くにゑて不來敦（英國南岸の港の名なり）の港の沖に至りしまでは海面に立てる波もなく恰かも万項の青席を敷き渡したる計りにて童迄も甲板に遊び合つゝ居たりしに次第に風の強くなり波も荒立ち來たりしかは此處の港に船り彼處の港に碇を卸ろし空打守る計りにて數日を空しく費やせしが十日ふ至りて漸くに風止み波も收まりしかは船は港を出たりしに東雲（十一日）近くなる頃に一天俄に掻き曇り遙か彼方の海面より大山流れ出づると見るまに吹き捲く颶風と諸ろ共に山にはあらぬ大濤の碎くる音は百雷の墜ち來るよりも凄まじく千砲の口を一時に放ちしよりも恐しければ船中

如何でか堪へ得可き立てば倒れ坐れば轉び有りあふ器物は粉なとなり窓なる玻璃は打碎け今に舟をも粉な未塵に碎けん計りの有様なれば船中只管餘念なく命と祈る計りなりし此時水夫は豫てより貯へ置ける糧食木材其他の財物百噸計り寶も命のあればこそと逆か捲く波に打捨つれば船体輕く浮み出ぬ去れば得たりと船長指揮鐘鳴らし滊力を增して船と速め數英里見る間に走りしかば人始めて顔見合せ生きさる心地のせしものから先きの心に引きかへて俄かに心も勇み立ち各々得手の藝をなし或は歌ひ或は舞ひ童抔に至るまで道化芝居の眞似などなして打興じたる折りしもあれ亦たも打來る大濤の船を擊ちたる其餘瀝甲板上に迸り頭飾りや衣服まで皆なひと濡れに浸され

けりされども波も漸くに勢優しくなりしかバ又々甲板に匍ひ上り追來る波を見渡して立て奇觀を賞づる間に亦もや遙かに泰山の浮み出しと見へたりしかばアワヤと叫ぶまもあらず駿浪山を覆へし又た山を爲す恐しさ比へん方なき有樣なれバ船中周章狼狽めきて防禦の用意を爲す間もなく船ハ打來る荒波に千尋の海れ水底に碎くる計りに沈み入りぬ折しも應路那土ハ艫に設けし羅針の邊りに紡糸の業となしをりしが斯る意外の變なれバ如何でか逃ぐる間のあるべき渦捲く波れ水底に陷りしこそ危けれ左れども童に似氣なき應路那土玆ぞ一生懸命と船の欄干握りしめ息も絶んず有樣と見てとる水夫金土列土ハ助けんものと檣けども逆まく波に自由を得ずあわや藻くずとなら

んとせしに漸くにして甲板へ足を踊らせ助かりけり左れども此時捲綱の上に居たりし列機と馬波耳と云へる童とは早や水中に陷りて桴の如き捲綱と共に波間に漂ふて或は沈みつ或は浮きつ今にも魚腹の鬼となりなん最とも憐れの有樣なれど助くる術も荒波の山も崩るゝ計りにて近よるべくもあらざれば此世の名殘りと人々は聲を限りに呼ぶのみなりしが尚ほ天壽や盡きざりけん折能く桅に取付て馬波耳を小脇に抱へ込みつゝ息き斷へ〳〵に船に上り漸く九死の一生を得しかば人々欣び堪へ難く一度に鯨波とぞ擧げたりける元來此れなる列機は常に大艦巨舶にのみ乘り組みて此度妾が乘りたりし小やかなる船抔には乘りしことあらざれば扨ては意外の事に遇ひしと後にて

語り合ふたりけり斯くて此日は漸くに日も西山へ入たりしかば明くる曉待かねて船の損所を修繕ろひ了り西南目懸けて進行しけるに今日は昨日に引かへて空ら冴へ〳〵と晴れ渡り漣波さへも猶は立もせず殊更ら斜陽の波間に陰くれ代りて輝く星影ハ閃々として果しなき潮に映じ時に吹き來る涼風に影の四方に逃るハ恰から千萬の螢火の風のまに〳〵飛び交ふ如く心地よきと限りなければ夜の更たくるとも打忘れ甲板上に停みけるに忽ち聞ゆる一聲ハ左舷々々の號令あれば何事とや出で來りしとあたり遠ち近ち見渡すに果して遥かの浪影に難破と見へし一の船の浮きつ沈みつぞるありけり左れば傳へし號令は之を救ハん爲めなりけりと少しハ心を安堵つけて瞳を凝らして

伺へバ船の進むに隨ふて次第々々に分明と舳に飾りし船名の加呂利那號と書せしを認めぬそも此船ハ二三百噸とも容る可きと思しき小船にて青体赤條艫に八飾り付けたる女の頭打來る浪に半ば碎かれ帆檣折れつ欄干流れ目も當られぬ有様ありしが船の間近く進むに及び手早く御す端舟に水夫四五人乘り組せ飛ぶが如くに漕寄せけるが若しや人をや居りもやせんと彼處此處とぞ伺ひ居りしが頓て水夫等笑みつゝも何か索むる有様ありしが稍やありて歸り來り彼の船何つの日にか難破しけん早や人影は止めざれど多くの伯爾土酒と塞子とを積み侍れば桶は移して持ち歸らんとさもうれし氣に申せしかばそは興ありと打歡び妾も衣服を更めて共に小船に乘移り再び破船に漕ぎ

寄せて先づ試よと一桶と甲板上に引出せば酒氣迸り燻々と鼻とも穿つ計りなれば一同均しく打歡び是れ昨日の艱難の勞を慰せんと上天より惠みを受けしものなる可しと悉く本船へとぞ持歸りけり左れど難破と覺りしからは最よりの港へ引き行く可きは普ねく定まる規則なれば其儘にして過ぎ行くことはいと後めたきことにはあれど陸地離れし大西洋此處より是を引かんには三百七十有餘里も引かでかなわぬことなれば斯る小船の力にて堪へ得可くとも思ほへず如何せんと按ずる折しも一聲吹き切る滊笛と共に長蛇の烟と吹き徊ふて走り來れる一船あり近づくまゝに見渡せば是れ一艘の商船にて船名模象加列知顯とぞ稱へたる最と壯大なる船なりしかば妾等の願ひと異議なく諾

がへ呉れぬさても妾も是等の爲めに甚たく時間を費やせしかど思ふにまして浪風なければ船は一時に七節波押し分けて駛せ行けば心地よきと言ふ計りなし明くれば七月十四日東天紅の告げざるに早や甲板に打出で此處よ彼處と見渡す中に今まで白浪天に連り果しもあらざる大洋と思ひ居りしに忽然と左舷の方に大陸の累々として浮出しかば審しみつゝ考ふるに此處のあたりは航海圖にも島なき處とありしと思へばいよ〳〵不審の晴れやらず途無を呼出し問ひ質せば仰の如くこの邊りは島もあらねば陸もなく彼なる象ちは海霧重なり〳〵る有樣にて今にや此處とも襲ひ來らんいざ水師にも見せばやと頓て水師の列機と巴運をも伴ひ來り暫らく共に見てありけるが是れ暴風

の濫觴ならんも計られず急ぎ用意をなすべしと前へ帆をれろし待居けるに空ら吹く風の漸くに絶へたるらんと思はしき頃より果して濃霧は追ひ来り船を取巻き大陽の光線さへも奪ひ去りて朦々朧々恰からに闇夜の如く咫尺さへ見分け得もせぬ有様は五里の霧中の夫ならなくに千萬の霧中に彷徨ふなれば覚束なさの限りなく急ぎ船房へと傭ひ入りけるに早や船手等は手配りし二人は船頭見番に二人は舵の運轉に一人は國の規則によりて大霧の號鐘打鳴らせバ霧に響きて哽々と鳴り渡りたる有様の物凄きといはん方なくいかなる事の起りやせんと生きたる心地はあらざりけるに大霧の間を漏る大陽の光りの増すに随ふていつしか大霧は消へ失せて跡方さへも留めぬのみか風

も吹かねば浪をも立たで最と晴れ渡る日和となりにき左れば船内一同に笑語立ちて歓び合ひしが船も錨を捲き揚げて亦たも羅針の西南を目的に船を進ませけり列機等の水師にも幾拾度となく此海を經渡りしことなれど斯る大霧に圍れけるは此度始めてなりけりと語り合つゝ身を縮めぬ

第二回

滄海孤島惹㆓情懐㆒
空山半夜失㆓同行㆒

壁と遮られし千仭の山や白雲凌ぐ峻嶺の高く雲井に峙立ちて続る浪花に現はれたるは是なん大西洋の一孤島保耳土三の島ありけりそも此島は摩寺島の東北三十五海里の合はへに浮む一嶋にて古にし昔に哥崙布此嶋の奉行の娘と

娶り詫しき烟りを立つるうち破れし器の東岸に漂ひたるに觀察の緒始めて繙けて千々に心を打砕き東の海に新なる一大陸のある可きと深く心に覺悟して葡牙の諸國を説き勸め櫛風沐雨千辛萬苦嘗め盡しげる不抜の心遂げて實のなる米國の世界にとゞろく繁榮の原を起せし母岬なれば小やかなれど尊とむ可く又貴む可きの嶋にこそと見渡すうちにいつしかに浪路遙かに打過ぎて不音の嶋を横に見つ遙に摩寺の嶋を望みぬ漸く近くあるまゝに自然に備る風光は絶壁千丈海面に聳へ山嶺起伏相連り茂れる草木生ひ包み數百の嶋は碁石の如く彼方此方に出没し浪を激して白玉を未塵に碎ける有様は奇觀と云ふも餘りあり殊に此方の灣内に一つの小高き嶋の根を貫き通せし空洞あ

りて溪澗恰ら飛橋の如く流るゝ水の聲緩やかに潺湲として此方に注ぎ其絶景は拙なき筆の盡すべきにあらず只だ行く船の速きを恨めり斯くて此日の午時頃に嶋の南の邊なる不安茶爾灣に船は錨を卸したりけり玆の邊は既に早や赤道近き處なれば炎熱恰ら黄金を溶かし石をも焦がす計りにて殊に吹き佩ふ熱風は肌へを焦す心地せられ堪へ得べくとも思はれず此ある悪しき熱風は世界に名だゝる亞弗利加の撒漠と名づくる沙漠より吹き來る一種の悪風にて此風受くる土地にては如何に冷しき土地にても寒暖計の七十九度を一度も下りし事なしとぞ際て海岸に近づきければ端舟に乗りて陸に登れば最も見馴れぬ橇ありて又た最と見馴れぬ二頭の牛に駕して牽する様なれば妾等之

れに打乘りて一鞭韃を加ふや否や牛は恰から空中を翔けるが如く走り出で險はしき山も濱邊の砂利もことゝもせず驅け渉り程なく不安茶爾の街にぞ着きけり此日は幸ひ村落の祭りを行ふ日柄にて老若男女の差別なく打興じてぞ遊びたり都て此處等の人民は「マクノリア」と名くる一種の樹木の下に群居して恰も家の如くになせり斯くて之より進み亭留と云へる小丘に上りて見下すに市街は更なり海灣を一目の下に見下して風光明媚云ふ計りなく畫工も筆を棄つるなるべしと暫しは去り得やらで在たりしが漸々くに下りて復た原の岸邊と差して歸り來れば小兒等夥多漕ぎ來り錢六片を海面へ投ぐれば如何に千尋の水底なりとも必ず拾ひ得るなれば何卒投げて賜はれと只管乞ふて

止まざれば予は興ありと投やれば夥多の童は我先きにと海面へパット飛入るさま恰がら鸊鷉の餌を求る如く獺の水面に遊ぶが如く陸にあるにも異ならず中に一八の小童は滊船の底と潛り貫けなんと云ひしかば皆々危しと止むる暇にはや水中に躍り入りければ無慚の事となしたりぬと思ふ間もなく彼方の方早や潜り拔けて浮み出しかバ覺へず喝采なしたりける如何に海邊の民なればとて小兒の斯くまで水に慣れしは實に感賞の至りにこそ程なく不安茶爾灣と跡に見なして加那利群嶋の其一なる手涅立布に艫と向けて進行しけるが東雲頃と思しき頃に高き山とて世に知られし手涅立布山をぞ望みたり近くまゝに眼を凝らせバ思ひし迄にはあらざれど山脈悉く側立し或は白

雲に中を掩はれ或は山の腹を遮られ蜒蜿遙かに連なれり豫て妾等の企にハ嶋の首府なる三他來津に投錨せんと定めたりしかど此府は氣候の悪しきのみならず懸隔り探奇の便りもよからずされバ船の羅針を向け替へて於魯太和港にぞ着したりそも此の港に舶りせしは重もに名だゝる手涅立布山を巓迄も押し究め奇景を探ぐる爲なれば陸に上ると直樣に我國領事の克土氏の許を訪ひ萬登山の用意をなしつ直ちに登山の途に上りぬ時早や既に眞夜過ぎて二時とも思しき時なるのみか夜は烏羽玉の暗なれば只だ乗り得たる馬に委せ心細くも徘徊り行しに頓て重なる山々の間と漏るゝ日の光り東雲とこそ明け渡れば馬は嘶き人々は始めて其身の千尋ある山の半ばに在

るを知りけり斯くて程なく朝飯を喫し復もや途に上りけるに忽ち一つの大曠原にぞ出たりける今迄經來りし土地とても巖洞濕地の邊りなぞは絶へて草木のあらざりけるが茲に至りていよ／＼甚しく黄白色と交へたる火山燼餘の燒石の平原遠く敷き連なりて流石に廣き土地なるも實に一毛の草木を止めず只だ渺漠たる有樣は撒漠の沙漠と其儘に移し出だせる計りなりしが漸くにして十時に至りエスタンシアドロスインシグルセスとなんいへる所に着したりけり此地は海面水平より九千六百廿九尺の高さありとか聞きぬ是より先きは殊更に險しき山路にかゝるを以て荷物は總て殘し置き馬をも驢馬に乗り代へて再び途に就きけるに道は直線一筋なれど埋むる砂礫に足疲て

一歩と進めば一歩は止まり驢馬も喘ぎに喘ぎたりしが溶解したる石灰に足を冷させ漸くに亞爾多維と云へる所につきぬ是より尚ほも登る可きあれど妾を始め小兒等は身を燒く熱さの堪へ難きと羊の腸の難道に堪へ得べくとも思はれざれば惜しくも足を茲に留めしが強壯健脚の男兒等は尚ほ全山の奇を探ぐらんと道踏み分けて山に登りぬ後ちに此等の人々の見聞し事の話を聞くに頂上迄の道筋は登るに連れて險しきのみか灰土滑に泥土の如く一足毎に股脚を埋め歩行の難きは今更に云ふまでもなきことなれど漸く頂上に經登れば風物滿目一として珍奇ならざるものとては無く且つ此山は千七百四年の後ちは絶へて發火をせしことなけれど今尚ほ硫氣の粉々と鼻を穿てるの

みならず時に一帶の烟霧を醸し忽ちにして人の立てるが如く忽にして猛獸の走るが如く忽にして怪物の襲ひ來るが如く忽にして太陽光を失し千態萬狀須臾の間に其形を異にしその恐しさ物に譬へんかたなく且つ硫黃明礬の類にして麗はしきもの、所々に散落なし居るを以て數片を携へ歸りしとなん語り傳へぬ斯くて是れ等の人々妾等の待ちし所に下りしは五時頃にてありたりしが彼の曠原迄下りし頃は早や黃昏となりたりけるが此時より塗無應路那土と佛耳の三人は一足前にと進みたりしに何時しか影を失ひたりぬ素より暗の暗さは暗らく黑白も分かたぬ計りなれバ道知る人さへ踏み迷ふに況してや知らざる旅人なれば斯る誤りなきにも限らず若し左ることのありもせば

猛獸多き此野邊に如何で恙のなかるべき如何はせんと按じはしつれど外に詮術あらざれば頻りに喇叭を吹き立てゝ信號なしつゝ下りけるに暫くありて小やかなる一村落にぞ下り着きたりしがかすかに火の光りを見しかば必定人の住居やあらんと急ぎあたりに近づけば果して一つの農家あれば於魯太和港に歸る迄道の案内なし呉るれば謝銀を幾何か與へんと乞はしめたるに主人は異議なく肯ふて頓て炬火振照らし先に立てぞ進み出しが實にも暗夜に燈を始めて得たる事にしあれば足の勞れも打忘れ歩み行ほどに何時しか又一村落にぞ出たりけるが早や夜半過ぎる頃なれは茲には足も得留めず直ちに於魯太和港に歸り領事の許を訪ふたりしに思ひがけなく三人は既に以前に

歸り居りしかば互に無事を祝しつゝ始めて胸を撫でおろしぬ此夜は其儘臥床に入りしに今日の疲れの一時に發し睡るともなく現つゝともなく唯恍惚として暫く身の知覺さへ覺へざりけり素より此度の企などは能く一日の業にはあらず數多の糧を貯へて天幕などをも用意しつ數日と費やすべかりしものを斯く一日に果したりければ身の疲るゝも理りなりけり明くれば七月廿三日於魯太和植物園を巡覽せりそも此園は其昔世にも名高き波保士氏の紀行にも書き載せたる處にて世界にあらゆる名草奇木五洲は更なり濠洲の奥の限りも捜り索め集め合せしことにしあれば四時爛熳の花絶へず吹き匂ふ風に香を送り衣裳もしめる計りなり其園内の結搆配置美を盡し善を究はめ人の

眼を奪ふべかりき是れをも観終りて船に乗らんと海邊へ出でしに妾の乗りれる船を見んと出で来りし人は恰から山を築きし如くにて中にも情ある人々は花籠などを我等に送り共周遊の悦意を表しぬ此日の午後嶋の知人に別れを告げて一聲發つ號砲の音諸共に纜解きて再び浮む大西洋遙か彼方の浪間より大加名利巴馬の諸嶼を望めり此日(廿四日)は正に本國英吉利を船出しより今日迄に三週日に三日餘の月日を旅路に送りたりけり

第三回　浪花接レ天大西洋
　　　　彩雲抹處是南米

涼しさや波間を漏るゝ夕嵐拭はで汗も收まりて海面に浮ぶ鱗魚は斜陽の光りに相映じ鹹の光り添ふていは

ん方なき心地よさ是なん甲布泥烏爾群嶋の中の一小嶋なる安土尼嶋に着きにし時の風光なりけりされど是れなる安土尼嶋は折りふし悪疫の流行ると聞きて少しく隔たる保土満克に錨を卸し石炭飲水などの用意をなし一つ再び南へ進み行きしに茲より名高き五太洋の其中にも舟楫の最も難やむと聞へたる太西洋の海幅の最も廣き處に至りれれば船はうね〳〵と恰から大盤中の粟の一粒人の心も自から覺束なくぞ思ふ折しも遙に陸地の見ゆると叫べは皆甲板へとぞ登り見けるに未だ定かに陸地を見ざれど今まで透明無色にて玻璃をも欺く海水は青黄色に泥打交り無數の海鳥雛上り殊に氣候の異りし樣何にとなく陸地に近寄りし心地せられいとも嬉しく思ふうちに水師列機望み見

て翌の東雲告ぐる頃には早や里汪に着せんと語りしかば皆々く是に力を得臥床に入りて眠るみけるが明くれば八月十八日大英國を出しより七週日と五日目に響く祝砲諸共に始めて南米大陸の里汪の港に船を繋ぎぬ斯くて其日に上陸し里汪、泥、邪寧羅の建造物幷びに市街の景況なんども見終りて烏低となん名づくる林に遊びぬ是れなる林は市街より五里計りをも打隔てゝ長さ數英里に連りて松柏鬱々く生ひ茂り晝尚ほ暗き密林にて見知らぬ禽鳥幾つともなく木々を傳へて囀づる聲は瑟と奏づる如くにて幽邃云はん方ぞなかりき斯くて歸船の道すがら國王殿下の宮居なる王宮前を過ぎりしかども伺ふ事さへ能はざれば記さんすべもあらざれど家屋の美、園地の奇、各盡せしものと見受

けぬ此地は奴隷の制ありてそが賣買も盛にて日々の新聞廣告に牛馬とひとしく競賣の仕出しを見ぬはなかりける殊に使役に至りても殘虐無道を極めたるは遉が野蠻の癖として人道知らぬとこそは云へど實に憐むべきの至りなりけり二日三日と留まる中に此處よ彼處と宴會の席に招かれ意の外の珍味美饗に厭きたりけるか中にもカシノーと云へる館は結構最とも壯大に金銀玉石を鏤ばめて彫刻畵圖に至るまで奇工造化と奪れざるなく殊に酒宴の助興にとて貴女の輩ら踏舞をなしゝが衣服は巴里の流行を寫し頭飾りに頸飾り腕環指環に至るまで皆當世の美と究はめ踏舞の体樣の音曲に能くも合せし有り樣は妾等企て及ばずと轉た感賞なしたりける漸く日數も重りて九月四日

とありしかば知りにし人々に別れを告げて里汪の港を拔錨なしける

第四回　數里暗礁海色黑　一群蝗蚱日光薄

九月四日里汪の港を出でしより大西洋とひと走りに馳りたりしが十日の午前五時頃に陸にもあらで何となく一帶黑き物を見しかばキャンドレットハ塗無を起し共に測量なしけるに海底次第に淺くして暗礁ありと知れしかば急ぎ艫を向け換て漸く命を拾ひたりけり今や航海盛にて行通ふ船の數繁き斯る處に燈明臺の設なきこそ遺憾なれ翌日東の白らむ頃に船は南米烏留克亞の南の端てある滿土烏以泥の港になそは着しけりそもこの港は南米中に一つの

都會と世に知られしがそが中にても別て又豪商大估の家居を占むるは巴消泥毛利能の街ありけるが是れなる街は普列土河の注き口なる北方の方に突き出したる岬端にて税關巍々と彼方に峙立ち其他豪商大估の家居玉樓金閣雲井に聳へ繞る園池の奇樹異草清潔なんと言はん方なし實に伊太利風の町構ひは愛らしくこそ見られたりけり抑も是れなる普列土河は世界に大河と知られたる亞麻孫河に相對で南米第二の大河にして其中河口の廣きに至れば對岸凡そ一百英里岸より岸を見渡すも唯だ漂渺たる浪を見るのみ斯れば風の荒立つ時は大西洋の海潮と互に激し凄まじき怒濤を起し來れるより舟子の恐るゝ所なりとぞ是より少しく上流に巴斯英列士と云へる都府ありければ妾

等之に趣かんと九月十二日の曉より普列土の流を溯りしに向ふの方より一とつの破船流れ出ると見る暇にアハヤ衝き當らんとなしたりけるが幸之をも免れて此日の十時と思しき頃に巴斯英列士にまづ安着しける此都は亞然珍共和國の南東に位し普列土河畔に打沿ふて滿土烏以土港と一葦水僅か八里を隔てしのみ斯くて程なく上陸せしに電信局の設けあれば幾十日も一行の書さへ寄せぬ故郷へ始て無事をぞ通じ遣りぬ是より更に上流の魯沙利に溯らんと船路の模樣を尋ねけるに是より上るに從ごふて川に淺瀬の多しと聞きて此處の邊りの水先に精しきものを雇入れ小舟を漕ぎて溯りしに程なく魯沙利の埠頭に着きけり此處は普列土の河畔にありて商賣大に繁昌し豪商巨估も

數多ければ街衢は端正砥の如く製作商業諸會社の規模廣大結構美麗人の耳目を欹てしめ左れば始めて見る人は如何なる人の宮殿にやと疑ぐる計りに見受けたりける是より十里の北方に當りて加多滿加斯とぞ呼べる小都府ありて世に名を得たる「鬻高」(肩掛の類)を織りて出せる土地なれば此地に住する人々は貴賤男女の差別なく之を着なさぬ者とてなく普く常用の衣服となせりとぞ此「鬻高」の上品なるは烏叫那と呼べる獸類の毛を織り編みて造り成し其質軟かなること絹の如く体を温め雨をも凌ぎ又能く永ざに堪ゆるものにて現に土人の話しを聞くに貳十年前三拾弗にて求めし物を今に倘は晴れ着に用ひ居れりとかや妾等國を出ずる時に或る友人の告げし言に若し南米國の

此の邊を歴渉ることのありもせば必ず醜高を纏ふ可らず土人は好しと悪しを見るに殊に眼の鋭ければ設し良き質と認らるれば直に首を切らる可しとぞ誡めけるが是れての醜高と名づくるものは大なる織物の四角なる最中に一つの穴を穿ち茲より首を差入れて脱ぎ着の用に供ふるなれば首を落せば手もなくて之を奪ひ取ることを得れば扨てそ斯くは告しあるべし、是より尚ほも内地をば跋渉せんと意を決し一行引き具し。十四日先づ第一に加巴那指して趣きなんと滊車に乗りし．に此日の午後の四時頃に同都にてそ着きたりける途上別に記す可き事なかりしも嵯峨雲を突く山腹に一つの野犬の巣窟ありて不思儀にも數羽の梟と能く親み互に害をなさゞるのみか常に梟二三羽は其の

巣門に見張りじて恰から兵營の番兵の如く左も嚴めしき体ありしは近頃珍奇の事と見受けぬ是より巴拉那の流に沿へる加無南都に趣かんと小舟に棹さし到り着きしに此都の街衢は大小の路に黒白の大理石とぞ敷きたりければ實に一層の美觀を添へたり是れより道を北方に取りて加々拉那に趣かんとなせしに道すがら見る平田沃野幾千町の數知らざるに皆な悉く荒れ果てゝ菜菓は素より一毛の草木の影も止めざれば如何はせしと尋ねけるに此地は既に此頃までは草青々と野を覆ひ穀物豊かに實りしかば今年は收獲の多かるべしと取らぬうちより撃沃鼓腹喜び合ひし甲斐もなく何地よりかは來りけん數千億萬の蝗蟲の忽然群り集りて流石に廣き數十里の平田沃野も數日を出

でず一毛さへも殘りなく食らひ盡して飛去りしかバ斯くハ憐れの樣とはなりし左れば此邊の百性族は先きの欣びを引換へて今も餓なん有樣にて日々此虫の驅除のみに心を碎きて居れりと語りき左れども如何に蝗蚱多しとてかくまで害のあるべしとは思ばへず巧みに懶惰を繕ろへるものかなと之を信實となさゞりけり既に加々拉那に着したりしが此處は近くに幷びなき賑ひ合へる處にて加々拉那河に打沿ひ居れば此河通ふ諸滊船は總て舳艫を此の地に輳め蒸氣車の通路あれば內外旅客の通行も又た最と繁きことゆへに旅館の結搆壯大美麗各其美を競ふたりけり偖て妾等の着きし頃より一天俄に掻き曇り太陽全く光りを失なひ恰から日の食む時に異ならず實に恐ろしき樣とありしかば如何なる故にやと土人に問ひしに是こそ所謂蝗蚱の一群空に充ち塞り爲めに日光を遮ぎりしにてこゝの邊りに斯る事ハ珍らしからず偶ま大群に遇ふ時ハ滊車とも爲めに轍を止め牛馬も爲めに動かれずと語りしかば始めて先きの蝗害の信實ありしを覺りたりける

第五回

淺瀨出沒碧波間
群山遠連馬日蘭

十七日加々拉那を立ち出で、南の方濼泥利亞に趣かんと夙とに旅裝を調へて各馬に打乘りたりしに折こそ惡しけれ蝗群の彼方の方に現はれて忽ちにして小丘の浮むが如く又忽にして風濤の怒れる如く行く路さへも定かならねば暫く猶豫らひ居たりしにいつしか全群飛去りて跡とも留

めずなりしかば漸く馬を進ませて漢泥利亞に徘徊り着きしが此處に豫て知已ある倍倫亞留烏留氏の家居と占むれば直に同氏の許を訪ひ旅寢の宿りも此人の邸に定むる事とはなしぬ翌十八日は日曜なれば耶蘇會堂に詣ふでたりし土人は巧に唱歌となして音節流暢喜ぶ如く又悲しむ如く風琴の音に和合をなしたるは實にも殊勝の儀を而し我國人も及ばずとぞ思ひき了りて此地の競馬を見物し尙ほ一二日滯留て遠近と遊び歩るき廿日に至りて此處を出で固留同和に趣きしが此處は南米第一の不健康地とぞ聞きたりけるが小丘四方を取り圍み濕り勝ちなる土地なるに空氣の通ひさへ惡しければ實に評語は空しからず左れば久しくも留り得ず程なく此處を打出で泥克留といへ

る土地に越へしに此地は南米の南にありて男女老若の分ちなく貧富貴賤を押なべて僅かの間を歩むにも必らず馬に打乘りて土踏むもの丶あらざるは尙ほ歐人の馬車に乘るより甚し然れば土人の家にては如何に貧しきものにても家に一馬を貯へざるはなし實にも一種の奇僻といふ可し尙ほ是よりは此邊りの內地を深く跋涉し再び元と來し巴斯英列士に歸りたるは是れなん九月廿五日にぞありたりける斯くて親しき人々に長き別れを告げるに僅かに旅の交りなれど人情深き土地なればいとゞ別れと惜みつ丶埠頭へ見送る人々は恰がら山なす計りにて妾が舟に乘りしを合圖に雙手を擧げて最終の別意を告げしと見るま丶に船は滊笛の聲諸共普別土の流を一散に走り下りていつし

かゝ大洋へと浮み出けり是より船は南を向ひ晝夜を分たず進行せしが廿八日の曉天ゝ如何なしけん少しく鬱氣を感ぜしかば臥床に暫し安らへ居りしに折しも一人忙しく駛せ來り船に火事の出來たれば早くも甲板ゝ出で玉へねと息せき敢へず傳へしかば妾ハ如何で驚かざるべき流石ゝ女の淺墓ゝ事の實否も問もせで只だ運命の盡きしと思へば魂飛び魄も消へ亡せて身體震ひ五体さへ知覺を失ふ計りありしが漸くにして匍匐ふ〳〵ゝ甲板上ゝ登り見るゝ何れも騒げる樣もなく唯望遠鏡を彼方へ向けて何れか窺ひ見るのみなれば未審しみつゝ聲高く火事ハ如何よ早や打消しか但しハ未だしかと問掛くれば茲へ來たりて彼れ見たまへと望遠鏡と差出せしかば扨てハ外か船ゝて

ありけるが由なき事ゝ驚きけるものかなと我れと心の輕卒恥ぢて漸く胸を撫で卸ろし望遠鏡に瞳を凝せば遥かゝ浪間の一艘船ゝ失火の信號掲げしが再び救助の旗を擧げ妾の乗りし三微無の助を求むる樣なれど烟一縷と見へざればこれなん失火をなせしゝあらで船中騒擾起りしを我船砲門の開きあれば砲艦なりと見誤り其鎮壓と頼まんと扨ては失火と示せしならんか其は兎ゝ角ゝ捨て置かれじと數人の水夫ゝ武具と着け彼の船目懸けて送り出し後より徐々と進みたりしゝ漸く近くなるまゝ紋克斯平運號と船名さへも讀み得しが此時水夫も漕ぎ寄せて其の副船長なる蘭支滿氏と伴ひ歸りぬ此時既ゝ船よりは烟々捲き揚り失火に相違なかりしと認めける扨て此副船長は那耳

威の出生にて能く其任に堪ゆるのみか英語を善くも解ず
るを以て失火の顛末聞き糺せしに偖ていふ様吾等の乗り
たる紋克斯平運號は石炭を積み載せて先きの日斯灣士を
航出して航海六十有八日まさに烏亞留巴來曾に進まんと
せしとき如何なしけん石炭中に自然と發火をなせしによ
り船内一同命を限り必死に力を盡せしかども何にしろ自
然と燃燒の質を具ふる石炭の數百噸に火の移り打消す可
くもあらざれば船内諸物を投げ棄てゝ窓戸を戸ざして火
路を絶ち甲板上に打出でしは是なん今より三日の以前渺
漠果しなき此海原に助を求めん術もあらねば只だ船体の
燒け果て沈沒するを最期とし共に魚腹に葬りなんと覺悟
を極めて苟且にも露より脆き運命を繋ぎとめてぞ居たり

しに思ひ掛けなく今しがた貴船の烟を見るよりも天命未
だつきざるにやと救助の信號なしたりけるに直樣かゝる
惠みを受けて船中一同喜び餘り共に涙に咽せび居りぬ哀
れ願くは一同を御船へ移し助け玉はれと涙と共に語り出
しかば聞取る妾も哀れに堪へかね共に涙を落したりける
斯くて我船水夫の中二人を小舟に乗り組せ殘る人々救上
げ船の艙口開きけるに烟焰恰から雲霧の如く空を焦がし
て迸出し寄近る可くもあらざりければ蘭支滿氏は船長と
協議をなして船を棄て乗組人を悉く我船へとぞ移したり
しに萬死に一生得しなれば喜び合へること狂ふが如く助
けし我等も諸共に陰德を得し良心の歡び限りなかりける
斯くて三時間餘も立ちし頃流石に堅き良船も一朶の烟りと

化し果てゝ今まも沈まん樣となりしが夫の乘組の人々は甲板上より悵然と殘り惜しげに佇みけるは實に痛ましきこと限りなかりき偖て遭難の人々は助命の恩を報ひんと船の動運何くれとなく立働きてありけるが十月五日の六時頃に水天漂渺の間にぞ一大島の現はれしと思ふ計りの一汽船烟吹き這ひ來掛りけるが近づくまゝに見渡せば是なん太平洋汽船會社の持船にて以留利滿號と其名を稱へ堅牢美麗の船ありければ我船旗を捲き上げて協議の信號なせしかば彼船之を見認めけん忽ち船の進みを止めぬ斯くと見るより妾等は遭難人を引具して彼處の船へと趣きしに甲板上に立出で此方の來るを待たりける妾は船に着すと直に船長常麻斯氏に口づから事の始末を物語り且

つ妾等は萬の國を周く遊ぶ航海なれば何時と歸航の期を定めず哀れ不幸の人々を大英國迄送り玉はれと最と懇ろに賴たりしに船長は一言の異議もなく輙すくこれを肯けがひしかば頓て遭難の人々を彼の船へとぞ引渡しけり實に船中は格別にて外に交り得結ばねば僅かに數日の好なれど數年の交り結びし如く別れのいとゞ惡しかりけるは是れ亦自然の情なるべし十月六日の東雲過ぎに漸く巴多訳亞の岸邊を過ぎて馬日耳蘭の海狹に入りしに右まは巴多訳亞淺瀬の浪間は顯れ左りは連拉泥比喸の攢巒峨々と峙ち山巓凸凹極りなく蜿蜒として雲井まで連らなる樣亦た一場の壯觀なりけり此日の日晩れに峽中の最とも繁華な世まどのをる三泥保因土にぞ着したりけり此地は智利の

植民地にして人口一千二百餘を有し一小都會をなしたりける左れども此處の家構へは皆木造の一階にして多くの餘地に取り捲かれ市街の体をなさでありけり妾等陸に上りてより直に我國領事を訪ひしにいと懇ろに饗應され且つ船中何くれとなく不足の物のありもせば此の港にあらん限りは購ひ求めて得さすまゝ遠慮をなさで乞ひ侍れと最とも手厚き恩命に限りなくこそ喜びけり此地は寒帯に程近ければ一年三百六十日空の曇らぬ日さへあらずときゝたるが果して妾の着せしより日として雨の催ふさゞるなく實に五月蠅くも詮術あら。ず唯だ引籠りてのみ居たりけるに一日天氣の晴れ渡りて涼風徐々と吹き來りしかば一行馬に鞭ちて此處よ彼處と徘徊し忽ちにして一つの森に入りしに彼方に手廣き池沼ありて恰から人造の庭園の如く流石に濕地の事にしあれば我國に見ぬ諸々の鮮苔一面に地を覆ひ苔間隈なく草花の咲き亂れたる有様は花氈を十里に敷きしが如く新綠燃ゆる夏木立幾里ともなく打續き鳥獸昆虫も寂にして聲なく實に仙境と疑ぐる計り斯る幽邃閑雅にして然かも風光明媚の土地は我國にても多くはあらじと轉た賞觀したる折しも又たもや空の掻き曇り今にも雨の墜つべき樣に周章狼狽めき旅宿に歸りぬ土人の云へるを聞くに三ヶ月中に一日の快晴あること稀なりとぞ誠に世界第一の濕氣に富める處と謂ふ可し

第六回
曉暉映出氷島間
桃林忽化黃金山

明くれば十月十八日一聲響く號砲の音諸共に解纜し南の果ての氷海の異なる風色探りなんと保土不安民へまで進みたりしに遙かに一帯の陸地の見へしが斷岸絶壁數千尺高く海邊に峙ちて白雲一抹靉靆びきたるは畫にも得難き風色なりける是なん南米洲の最南端不呂和土岬の海岸なれば寫眞術幷に圖畫に巧なる賓無氏をして撮影せしめぬ斯くて英吉利利知といへる所を過ぎんとせしに左舷に遙かに一艘の小舟漕ぎ立て漕ぎ立て此方に向ひ頻りと叫べる有様は仔細あるべく見へしかば少焉舟を止めたりしに忽ち漕ぎ寄せ來りたりしが舟には二人の水夫乘り組みて一人は頭に革を載きて偏に楫以て船を漕ぎ一人は暇なく垢搔き捨てて船の沈むを防ぎたりける(この船は荒木を動物の

筋にて結付けしものなれば水の漏れ入ること甚しくこれと汲取らずば沈み果つるなり)頓て三徴無より投げ與へたる帆綱に取付き烟草と麺包と與へよと頻りに乞ふて止まざれば望みの如く與へけるに其酬にとや思ひけん已れの蒙りし革を贈り呉れけり是を見るより此内の二人は五六匹の川獺の皮にて造れる外衣と贈り烟草を與へよと乞ひければ再び之に烟草飾球小刀等を與へたりしに傍へに見て居し一人の婦人已れの着たる上衣を脱ぎて何でも與へ賜はれと乞ひければ烟草飾玉鏡等を與へけるに此時婦人は伴れ來りし一人の小兒と諸共に妾の與へし飾球の青赤緑の麗はしきを見互に微笑み打喜びしは遉は未開の民にして斯る物など見しことなければ是れぞ誠に前後にも未

だあらざる欣びあるらん此人々は此近海の島人にして中まも婦人は其顔貌麗はしきまはあらざれど夫の飾球と見て微笑みし時などは真とに愛らしく・ぞ見受けたりける是より次第に南みして保土我蘭土と打過ぎつ斯以土運土に至り着き又海峡の西端ある能土岬は進み着しに此處、の邊りは早や既に南氷洋の部分に當れば空ら吹く風は凛々と肌を切り裂く計りにて其寒さといはん方あし此の氣候は一と年の内寒暖計の四十度より五十度あたりを昇降し若し冬空に雲降れば二千五百有餘尺より三千五百餘尺を積むとか、かゝれば近海は氷の島の浮きつ沈みつ流れ行くこと夥たしく若し此の島に衝突すれば如何に堅牢き鐵船にても忽ち破れ砕くるとぞ左れば航海の危きこと比へん

方あきことなかけれども此氷島の大さへ大約十五里より二十里計り色は青緑或は純白恰から大山の漂ふ如く潮につれて押し流され其凄まじきこと言ふ計りなく彼の北氷洋の氷塊の。流るゝものと日と同じくして語る可らず扨で此の地は殊の外風色他地に異りて曙空まゝ紅を流し渡せる彩雲の陸み積れる白雪を染て出せる桃色は恰がら萬里の桃林を目のあたり見る心地せられ漸く旭の昇るまゝ連れて今迄も見し桃林はいつしか黄金の山と化し黄色燦々く氷の山の溪間々々に映ろひて眼を眩ずる有様は筆まも紙にも得盡されず貧無氏は此處こそと得意の撮影なせしかども是さへ思ふまゝあらず唯だ萬一の形を寫圖し後の記臆に供ふるのみ十三日一天俄に掻曇りしかば、驟雨をや降り氷く

るらんと思ひ居りしに雨にはあらで塵灰の空一面に降り連りなり咫尺も別らぬ樣なれば船中不意の變に驚ろき急ぎ窓戶を戶閉しゝに凡そ一時半を經て空ら晴れ渡りて朗らかに亦た一點の曇りを留めずなりたりける按ずるに何れか近傍の噴火山の噴出なせし塵芥を風のまにまに吹き送りしならんか明くれば十四日の午後二時頃妾は臥戶に休らへ居りしに一群の鯨鯢我船の四方を圍み現はれたりと船內大に打騷ぎしかば頓て甲板に立出で見るに水面一樣に渦紋を現はし吹き出す潮は夕陽に映じ幾つともなく大虹を海の面に立てしが如く船をも呑む可き大口を時に開きて鱗魚を餌食になさんと追行く樣恐ろしなんと云はん方なく身の毛も堅立つ計りなりし斯くて十五日の曉頃に船は

錨を捲き上げて南米州の西部なる智利を指して走り進みぬ

第七回　越來大洋數千里　喜見自由樂土港

後は峨々たる山を負ひ前には汪々たる海原帶びて集まる帆檣林の如く峙つ白壁雲かと訝かる是れはこれ南米智利の國の一都會なる烏巴來祖港の遠景なりそも此港は智利國の最も要の地位を占め東の方は安的斯の山脈自づと楯をなし北は荒海大西洋港を繞る海岸は斷崖絕峭雲井に峙ち港灣廣濶嚢の如く深さは凡そ三十余尋實に最好の要害にして又最良の港灣なれば不虞に備ふる堡塞は懸崖危壁の間に聳へ數十の砲臺其間に散布し儼然として港內を鎭

壓したり、殊に集まる英米佛伊其他諸國の軍艦商船各國旗を翻へし纜索帆綱打交ふて恰から蛛蜘に異ならず實にも繁華の港と知られぬ此の港名ある烏巴來祖は其原西班牙の用語にして自由樂土の意味ありけるが彼の大西洋の荒浪を辛くも無事に經航りて此この港へ船を入れ始めて自由樂土の思をなすは今も古も押なべて航海人の常したれば扨は其まゝ名付けしとかや斯れば自然と船舶の舳艫を茲に集むるは北米洲にも名も高き桑港にも優れるとぞ妾等此處へ着したるは十月廿六日の事なりけるが此日直に上陸せしに市街は豪商軒端を并べ巨店大肆の數知れず日に幾萬の商ひありて利益も多きことにはあれど皆外國の人手に成りて土人は氣力に乏しき故か少しも是れと競爭はず

却て自ら外人の頤使を受くるを恥とせざるは眞とに可憐の限りにこそ土人は總て西班牙國の人の支れし後裔なればば瞳子碧からず頭髪黑く容貌總べて柔和にして又獰惡なる處少なし婦人は面色雪を欺き粉黛假色色添へて頭に黑き頭巾を戴き其尾は垂れて腰下に至り身には濶衣を着けたる樣耶蘇舊敎の僧服に似たりき此地は遉がに繁華なればば世界にあらゆる物品の一として缺げる物なきも中に最とも驚きたるは博物館の壯麗なり萬國の禽獸虫魚甲介の屬悉く集め得たるは申すに及ばず乾固物の人間の如きは夫の木乃の種類にして男女老幼駢列も一目身軀に粟を生ぜり又最も驚きけるは土地の風俗鄙猥なるなり此地上流の人々は學識敎育も備はりたれど稍や下等なる人に至れば

威儀禮法は地を掃らひ淫風最とも盛にして都人の過半は私生の子なりと實に金甌の一缺とや申す可きか三十日に此港を出で四千有餘の鵬程を目出度茲に打越へて海路も是より太平洋へ始めて舟をぞ進ませけり斯くて晝夜の分ちなく船は西へと進みたりしが先づ第一に曾採丁より不連度利群島に趣き夫れより三維斯諸嶋へ針路を定めぬ又ヂヤンフエルナンデーズ嶋は彼の歐洲に名の轟きし魯敏遜克流約の漂たりし古跡なれば船を寄せんと思ひしにつれど未だ是より二百里に餘れる海路を隔てたれば殘り惜くも思ひ止みけり抑も妾等太平洋を航り初めたる其日より千里に近き海路を航れど船は素より空を翔ける鳥さへ眼に遮ぎらず唯だ鯨鯢の折節に潮を吹くを望み得るのみ十

一月二十七日午後一時雲水接する彼方に當り駝鳥の翼さにさも似たる一髮青を望みたれば航海圖を按ぜしに是れなん多々固兎魯亞となん名づくる曾採丁群嶋の一小嶋にて南洋群嶋の極東に該り嶋民更に外人と交らず偶ま外か人の來るに遇へばしば〳〵殘虐の所爲ありとぞ見へたりしかば舟は次第に近よりしかど敢て輙すく上陸なさで先づは内地の樣子を見なんと妾は帆檣の頂に上り横木の上に腰打掛しが女に似氣なき事にしあれば恐しさなんと言ふ樣なかりける頓て途無をも登り來て望遠鏡にて打眺むるに内地は圓形の湖水ありて嶋の一方灣をなし船の出入の自由にして一時の風波とも凌ぐ可く見受けたりしかば頓て船をば彼方へ進め此れなる灣べと錨を卸し心細く

はありたれど直に上陸なしたりしに道に四五人の土人に遇しが怖れて森へと逃げ入りけり左れど炊烟所々に立ち騰るを見れば土人の多きは推し測られぬ翌日保尾嶋に到り着き又も上陸なしけるに逐無一人は攻撃を恐れ猶躊らひ居りしを説き勸めしに武具を装ひ漸々くに共に上陸なしたりけり先づ妾は如何にもして土人と好みを通じなんと飾玉小刀繪畫の類を携へたりしが第一番に見當りたるは椰子樹の繁れる其下とに月も漏る可き茅の屋ありて其の傍らに二三艘の小舟をぞ繫ぎ留め五七の土人何にやら物洗らひなしたりしが少しも抵抗なす樣なければ少しは心も安堵つきけり此邊も亦た珊瑚より成りしものにて中に大なる湖あり左れど土人の心根も未だ確かとは知り得ざれば湖

水に浮ぶも猶躊らひけるが愈よ〳〵敵意のなきを見濟し頓て小舟を浮めけるに清漣低く緑樹を浸たし清風高く白日曛じ風光明媚言はん方なく殊に久さ〳〵太洋の打つ浪をのみ見渡して斯る風致の珍らしければ亦た一層の快を覺へぬ頓て此處より陸に登れは怪しき者にあらずと知りしか二三の土人打連れ立ちて妾等一行の手を捉らへてぞ打振りけり是れこの嶋の禮と覺へぬ斯くて妾等を傍への小やかなる茅屋に伴ふて暫らく安息らへ得させたりしが茲には小兒と婦人と住居し各々手を振り禮をなし藁にて編める敷物を與へぬ此の茅屋は木枝木葉等にて構へしものにて其いぶせきこと比へん方なく厩にさへも劣りけるが婦女子は面色少しく黒けれど容色最も麗はしく妾の此

に坐を占むれば庭に生ひ繁る椰子の結べる實を打碎き其の液汁を啜らせしに其新鮮なると熟せざるとにて何は一層其の甘美を覺へり斯くて土人は鳥獸菓實の類を持ち來り妾の足下に置きたりしが是れなん妾に贈れるなりとぞ是より嶋地を經廻らんと臨る烟を心の的に珊瑚の上など踏み渉りしに一部落とも思しき處にぞ到りける此處には土人の家構へ最と小やかなるが五六軒打幷びたれど皆土人の居合さゞりしが唯其中の一軒に二人三人の婦人ありて團欒つゝも談し合しが此等の土人は最と忠やかに温和を以て待遇しゝかバ妾は携へし飾玉鏡小刀等を與へけるに最とも嬉しき顔貌にて土地に産せし麗はしき貝甲等を妾に贈りぬ此嶋端づれに白皙人の住居ありと聞たりければ如

何なる者の住むにやと遙る〴〵尋ね行きたりしに更に影をも現はさゞりき察するに南洋諸嶋誌に書き記せる所謂大洋漂泊の人々にて大陸何れかの民草の人目を忍ぶ無頼の輩とゝに忍びて近海を行き通ふ船と交易し利慾を貪ぶる者なるらんかそも始めには此等の嶋に如何なる患き目や見るらんと心もいとゞ安からざりしに少しも患目を見ぬのみか土人のいとも懇ろなりしは誠に幸ひの限りなりけり

廿九日此處を出で他比丁嶋にぞ打ち向ひぬ

第八回

堪レ賞玉雲蕉筵渚
可レ憐攫食野蠻俗

十二月二日他比丁嶋の巴比丁港に投錨せしが時しも天氣は朗らかに空らに懸れる雲さへあらず所換れば品換り眼

にとまる事々物々異形異物にあらざるはなく先づ濱邊には蔦に似たる黄色の蔓草蘿々と生ひ繁り糾草一面に綠を燃やし他所の海邊の眞砂子以て白妙へ造る如きにあらず市街は道路の兩側に木造の家屋軒端を列らね巷に植し種々の樹木は悉く皆老幹巨木鬱蒼として生ひ繁り遠く望めば隧道の中を歩むに殊ならず土人は概べて外面の衣服体樣其他の飾りに最も心を盡せる如く殊に婦人の着服などは各其美を爭ひて頭は夥多の花卉にて飾り往來路傍は堆高く積集めたる諸種の菓實外邦向けて輸出にてもなさんず計りの樣なりしが是れ皆一つとして妾等の其名をさへも得知らざる最も珍奇の菓實なりけり是れ等は茲に遊べる人の第一に眼を注ぐ所なるべし又此の市街の其內に支

那人の住所と言はるゝ所あり濶衣豚尾の頑固風の依然と萬里の外に存せるは實に笑止の至りと云ふ可し此嶋嶼の攝政なる保瑪路后の宮殿は佛國提督指揮官の官邸と相對し巧み盡せし園圃は金閣玉樓の間を続り洋々果しもあらぬ青海原は恰から庭池に異ならず一望眼下に落ち來たり眺望の妙へなる比へんかたなし當時后は孫姫なる保羅々々嶋の女君の安否を訪はんと佛國軍艦に打乘りて去ぬる日彼地に趣かれもとか聞きけるが土人は之に不平を抱き耳目を集めて怨言やき居りぬ此處と見了り直樣に我國領事を訪けるに領事は妾等鵬程を遠しとなさで萬の國を經へ歷る勞を慰めんと珍味美食を饗應されしのみか嶋の目新しき珍談奇事生活風俗商業の良否盛衰佛國政府の政略布

敎の方針等事落もなく語り聞けられ妾も亦た本國の近況など語り出で我をも忘れて夕日影窓にさすさへ覺へざりしが漸やく黄昏近き頃領事君の案内にて世にも名高き珊瑚礁にぞ誘はれけり折ふし月は皎々と冴へ渡る空に輝き珊瑚礁の浮游昆虫の佩飼する迄も見分け得れば夫の珊瑚礁の白珊瑚は累々疊々月影の湧かし出だせる萬頃の金波に光り映ろひて名だゝる工手の心を盡し磨き出せし光澤よりも自然に備ふる切磋の光りあたり目眩ゆき計りありけり斯くて此處にて大小の珊瑚の切片など拾ひ得てまさに船に歸らんとせしに忽ち滿灣漁火起り千點萬火空ら燒きて焦がし壯觀なんと云はん方なしそも此漁舟は獨木舟にて乘組凡そ三人あり一人は火を燒き一人は楫、中の一人は利銛を携へ巧みに魚類を衝き捕るなり夫の舟人の魚火に照らされ淡暗き星空に映ろひし樣は誠に能く工人の希臘古代の象像を彫刻するの模範となすべし斯くて妾等二三日へ足を留めて遠ち近ちと遊び歩きつ居たりけるに或る日此嶋の太子と其令弟妹が妾等の遠行を喜みせられ饗宴賜はる可き旨通ぜられしが頓て其日となりしかば妾も此の地の土服を着し頭に花冠を戴きつ首には花の環を着けて王宮中の拜謁所まで到りけるが程なく太子は出來り妾の手を取り先き立ち玉へば無數の從者簿鹵嚴かに後へに隨ひ波那々斯樹の茂れる森へと入たりしに此林中に土風もて營みなせる宮殿あり殿を繞る泉流潺湲として涼氣を動かし屋を蔽ふ波那々斯樹は鬱蒼として淸陰を貯へ屋宇

樓閣高潔言ふ計りなし斯くて殿階を經上れば殿内一層高き處は黒白色の布を以て縁へ取りたる最とも美麗はしき疊を敷き其中央に緑の色の滴る計りの芭蕉の葉を敷き蔽ふたる其狀ハ机帛にぞ似たりける扨て其葉上に山海の珍味を夥多く楪盤に盛りて處狹きまで打列らねしが其中の一二を記せば牡蠣、蒸雞、煮豚、麵果橙、蜊蛤、蠻苺等の類にして客前には鹽水を盛りたるコップは椰子の實筍杯を添へて差置きぬ姿等此の室の中に入るや芭蕉葉を取り卷き圓坐なせしに太子は島語にて起食の挨拶ありければ一同饗に就きたりける其食ひ方の略を記せば先づ第一は傍へあるコップニ盛りし鹽水と椰子實の打碎けるを搔き合せて糝汁となし是れを種々の食物につけ肉指小刀等を用ひず總て徒手にて摑み食ふなり斯く珍味美饗の饗應なれど箸刀を用ひず徒手にしてつかみ食ふの一段ハ野蠻の域を免れざるこそ憐れなれ十一月八日是より三維斯嶋にぞ趣きなんと北に向ひて船を進めぬ

第九回

火漿迸出如雨霰

振動聲訝百雷墜

二十二日三維斯群嶋の其中なる哈維の港北羅灣へ船は安く着たりけりそも此島は一千五百四十二年の其昔西班牙の人牙也訊となんいへる人の始めて發見せる所にして其後二百有餘の年月を經て古各といへる我國人の再び此地を見出して己れも茲に住居を定め種々の事業を營みたりしに憐むべし一千七百七十九年土人の爲めに虐殺せら

れ敢へなく異郷の露と消へけり此地太平洋の中央にある一孤島にして氣候温和に土田肥へ殊に良港數多く船の出入の便より好ければ最と富饒を極めたりけり偖て此の島へ錨を卸すや直に船より上陸し豫ねて已れの識人ある今鳥英氏の許に至り音に名高き噴火山希琉山に經登らんと百事用意を調へて再び本船に歸りたりしが日は早や入相の頃となり物の色をも定かならねど甲板上に打出見れば浪間に聳ゆる希琉の火山燄々遠く空を灼き焦し焦石火焔の逆る様數萬の烟火を放ちし如く光明赫々として輝やき渡る是れぞ天然の燈臺なりと評し合ひぬ翌二十三日の朝早く上陸して馬に騎り登山の道に就きたりけるに生憎や驟雨の霏々と降り出て道路の泥濘馬蹄を沒し最とも歩行に難みしかども四里計り走りたりと思ふ程に半途家といへる所に至り茲にて晝食の支度となし又も山路をたどり行けばいつしか黄昏近くなり篠と亂して降る雨ハ空を掩ふて暗さハ暗し咫尺も分かぬ暗闇を照らす火山の焔を的に以律列來的人の火柱を得たる故事を想ひ出で只管道を歩みたりしが向ふより騎馬せし一人の詞の米國訛りの多ければ如何なる人にやと語と掛くれば思ひきや是れなん火山近くの旅店の主人桂然と云へる人にて妾の今日來たらんと誓ひたりしに餘りに時の遲きものから雨を冒して此處まで出で迎へりと語りければ其懇ろに力を添へて漸く桂然の邸に着きけり此夜妾等の憩い室は崎嶇羊腸たる險山に向ひ風光云ふ計りなき有様なれば眺めに飽で夜深

から寝をもやらでありたりける明くれば十月廿四日午前三時今日こそいよ〳〵希琉山の絶奇と見んと同行八人案内者二人荷物を持てる人足三人都合十三人を一行となし旅店を出でゝ程なくも三百尺許りの峻坂下りぬ此處は昔の噴火口にて今は草木生ひ茂りさせる異況もあらざれど次第に頂き近きに隨ひ噴原漠々く石灰積もり時に嵐の吹くにつれ灰の白波捲き起し又吹き出す瓦斯の氣は鼻を穿ちつ喉咽べり進んで小流の邊りに至れば水にはあらで沸ぎり切る熱湯滔々と奔流し蒸す蒸氣は濃霧を起し呼吸もなし得ぬ計りなれど尚ほも力を勵まして益す〳〵頂きに攀上るに石灰いよ〳〵清らかにして硝子の如く硫黄明礬其他の鑛物何れも各結晶し三角体の玻璃の如く燦然たり

に輝やきたり頓て絶頂の火口に至れば先きに立ちたる案内者の時々く焔に吹き飛され辛くも免るゝ其有樣恐し〳〵も又恐かなりけり妾は一斷巖の上に攀ぢ火口を目下に見下ろせしに穴の深さ大凡そ一百餘尺廣さ十二三町もあるべきかと思しき所赫々くたる燃火の湖恰がら血漿を流せし如く振動の聲は百雷の落るが如く焦石飛で雹霰の迸るに似たり洞間一大鍾乳石わりて垂れて斜めに火口に臨めば飛散る石は之に激して更にあたりを轟ろかし恐しと云ふも恐かなりけり又妾の足下よりは焔に濕める水蒸氣霧の如く立上れば洞下に熱泉ありと知られける斯る奇狀を見る中に千萬無量の變化をなし奇々妙々く比へ方なき計りなれば何れも眺めに飽かぬ間にいつしか太陽沈み果て黄昏

近くなるにつれ焔はます／＼色を増し其凄さ物に比へん方なければ火口と少しく退きて新らしき空氣を呼吸なし携へ來りし行厨を少しく食はんとなしけれど胃腸苦しく喉を下らず端無く彼方を見渡せば日の淡暗くなるにつれ焔は妾等に誇るが如く光明空に輝きて滿天紅を流せし如く早や日も全く晩れ果つれば激動の聲澄み渡りて凄まじきこと彼の怪物の柵中に自由を得ずして逃れ出んと狂叫ぶが如き心地せられて心細きと云んかたなし斯る折しも追々に熱を感じて堪へ難ければ圖らず四方を見廻すにこはそも如何に今迄は淡黒色と見し灰のいつしか紅色と變じ果て渺々たる曠原一塲の火界となりしかば之れハ如何にと打驚き暫しハ言語も出さでありしが唯だ光線の淡

らぎて次第に火色を現はせしにて別に變事のあらざるを漸やくにして心付き始めて生きたる心地をなしぬ左れども携ふ杖は焦げ紙片は灰燼となり盡したれば亦恐ろしき地位なりける斯れば久しくは留り得ず夜の半より歸路に上りたりしが後まで之を想ひ出せば身体に粟をぞ生じける始み桂然氏は妾と誠め必らず導者の後邊に隨へ左なくば如何なる災に會ふも計られずと最と懇に諭りたりしかば只管導者の行に任かせて歩みたりしに一行少しの恙もあらで桂然氏の邸に歸りぬ是なん十二月廿八日の三時頃にぞありたりけり

廿九日ホノルヽへ向け進航しけるに路にセルゲーの嶋を過ぎりけりそも此の嶋は癩病患者の巣窟にて全嶋人民二

人としてこの難病に罹らざるなしとは又如何なる故にや
と尋ぬるまでこの三維斯諸嶋中には癩病最も流行し夥多の
人々に傳はりて防ぎ得可くもあらざればこの疫に罹れる
ものは避病の爲めに此れあるモルケー嶋へ押し渡らせ再
び本嶋に歸らしめざる規則あれば扨ては完全の人なきな
り左れば此嶋へ流されし病者は父母妻子にも生別し恩愛
情けの羈絆を絶たれ音信さへも杜絶たる孤嶋に一人謫居
へて日々に故郷の空を打守り泣より外の事なしとぞ又た
一度此處へ渡れば多くは本復することなく異況の鬼とな
り果るとかやかゝる規則の嚴かなれば假令病にかゝらず
とても一度此處へ航りしものは再び本國へ歸り得ざるに
獨り佛蘭西國の宣教師某は斯る無緣の衆生を濟度し各安
心を得させなんと無病健康の身を持ちながら遙〳〵此
處へ航り來て患者と憂きを共にせりとぞ眞にや斯く行ふ
てこそ僧侶の分を知れりとこそ申す可けれ

第十回 數點鐘聲年光新 滿船載月賀佳辰

十二月卅一日ボノル、港に着したりけりそも此日は一千
八百七十六年の惜しくも盡くる日にしあれば左なきだに
除夜は思ひに沈むものを別けて萬里の旅空なれば越方な
ど思ひ出して寢をも得やらで居たりけるが頓て深け行く
夜半の鐘に逝ふる年は一千八百七十七年正月元日とぞな
りにけるが船中俄かに鐘聲起り妾等と同じく碇泊したる
不安士號も亦た十六點の鐘聲響けば定めて火事の報ある

らんと急ぎ甲板に経登れば総員各正装なして式嚴かに新玉の迎へし年を祝し居れば扨ては儀式の報鐘なりしと吾れながら恐ましくぞ思ふたりけり此時眼を凝らして窺ふに彼方に泛べる数艘の小舟は正しく一隊の楽人と見へしが漸く此方へ漕ぎ寄りて妾の側近く寄りたりけると見る頃より神歌俗歌を奏で出で妾等のため新年の祝儀とこそは表しける頓て不安土號にも趣きて同じく奏楽なしたりける折しも月影清らかに金龍萬里の浪間に翔り和以氣の椰子樹巴利の山照らし合して佳色を呈し奏で出せる音楽は嘈々亮々冴へ渡りて幽凄孤客の腸を断ちけりそもこの楽隊はホノルヽの唱歌場より贈れるものなりかくて東の雲過ぐる頃小児を伴ひ甲板へ再び打出で見渡すに二艘の

独木舟泛び出しかば是れ商人の売初にや来れるなるらん好き品なれば購ひ得させんなど小児と打語ふ折しも彼の舟は既に間近く漕ぎ来りしが忽ち一の網を取出し海面へパッと投入れしに始めて漁舟と覚とりたりしが獲物やなると窺ひ居しに鮮鱗活々数十の魚を一時に捕らへ獲たりければ快爽こと限りなく興とに新年第一の見物なりとぞ賞し合へり

此日当地の皇后宮より年新まる寿の筵に妾も召されければ午前十一時陸に上り小児諸共最と華やかなる園囿の中に路して宮門のあたり近くに進みたりしに布哇の主宰兹にまで妾の来るを出迎はれぬ是なり主宰の後邊につき添ひ夥多の房室打過ぎつゝ皇后宮の尊前に到れり后へ欧風

にて青白なる朝衣を召し布哇の勳章胸邊に掛けて金色帶びし壇上にぞ立たせられけり宮女二人ハ朝衣を着し后の御後に敬ひ侍づき其他の貴婦人數多く何れも歐風の衣服を着し巧を盡せる花帽子玉を鏤ばむ首飾鉄釵裙襯華々く麗々く妍を爭ひ美に誇り列を正して居並たり其艶々く窈窕たるや實に恍惚と誰人も措置を失ふ計りなりそも此后は豪勇の聞へも高き加比於良后の御孫姬に當らせられ御名を加比於良と呼ばせられて玉顏花を羞かしめ氷肌は雪を欺きて愛敬溢るゝ其中に俊勵威嚴の備はりて最も賢く渡らせらるこれより先き嶋の住民悉く比陰と云へる女神を信じ此神希琉の火山に捿みて如何なる祈願にても聽かざることなく又此山へ登るものは忽ち嚴罰蒙るべしとあらぬ妄

說傳播して民の心を惑はしければ皇后甚だ歎かせられいかにもして迷の夢を打破らでは措くべきかと女巫や信者の諫めも聽かで夫の人民の恐れ戰く希琉山へ自から先きに押し登り凝り頑まりし迷の雲に遮ぎられたる眞敎の光りを茲に輝やかせ民を塗炭の中に助け國を累卵の危きに救はせられしは實に著しき御功とこそ申すべけれ斯くて皇后は姿を誘び祖先より諸帝王の畵像を懸けたる一室へぞ入らせられけるが掛けたる畵像の巧妙なる誠に造化を奪ふ計にて人眞人と疑がはしめけり是れ皆な全島名手の畵なりとか聞く此の像中の帝王は各々肩章掛けさせられ皇后宮は歐風の朝服を召されし御姿にて何れも燦爛目を眩せり唯加目波目二世皇帝及び皇后は今上曾て英國に遊

ばせられし折からに吾英人の寫せし所なれば今其略を記さんに帝は青色の上衣を召して隈なき迄に各國の勳章夥多帶させられ皇后宮は八絲地の服を纏はせられ頭に白毛の帽子を冠し首腕共に玉石もて裝ひたる飾り環を着させられし其面貌語らせ玉ふ計りに見受けぬ又傍らに路易非立布、拿破崙三世兩帝の畫像ありけるが何れも名手の畫きしなりとぞそも其以前此像を畫がきたりける當時には二帝の名聲世に譟ろき震恐せざる者なかりしが此像を搭載せて來れる商船の僅かに南米保崙岬を越へて三維斯に着せる迄に早くも二帝の權力は昨日の夢と覺め果てゝ故郷にさへも得留らざるいともはかなき身となれりとぞ實に人間の榮枯程計り難なき物はあらぬぞかし

此日の午後に嶋内の巴利の山邊へ遊ばんと七英里ばかりも步みたりしが此山は全嶋の脊骨に當れる山にて山腹一つの平岡あり眺望最も絶佳なれど夕陽は既に影淡暗く玉兎未だ光りを發たず賞つる所由のあらざれば惜しくも其儘歸り去りけり明け、て正月二日の午前碇舶なせる不安土號に帝の臨幸ありけるが數番の射撃と天覽ましまして還幸ありぬ午後には妾等の船に駕を枉げさせられ船内周ねく見そなわして二時間を經て天顏美はしく還幸ありぬ帝は体幹飽く迄逞ましく容儀優々く最と美はしくぞ渡らせられけり頓て皇后宮にも皇妹を伴せられ妾の船へと行啓ありて懇なる御物語りなどありて還啓ありぬ翌日午前妾等は克陰斯病院の内部を見なんと上陸なせしが其結搆輪煥

華麗目を驚かし病室閑靜に庭園幽雅醫員精妙に器具備はり誠に妖氣を挑却するに足れり此の時患者は九十人ありて男女は階上階下に分ち一室毎に花瓶を安じ百花を多く挿みたれば滿室馥郁香氣人を襲へり是れ亦た生養の一端ならんか斯くて病院も見了りて王室の旌功碑を拜觀しけりそも此の旌功碑は王家の最貴物にて容易く國民にも拜せしめず況して外國の人民などに拜せしむることと絶へて無く唯だ是れまでに各國の水師提督のみに限り特許を蒙り拜觀せしとぞ左ると妾に許されけるは眞ことに異常の特典にして光榮此上なきことにぞありけれ此の碑は丘陵の上にありて小かにして美はしき建物あり既に碑下に至れば諸親王方の居玉ひければ互に種々物語りなどなした

りしが此處は四方の眺望眼下に集り歴代國王の墳塋列を正して築き并べり此の墳陵の柩槨は固亞と名づく木材を用ひすさましく大きく造れるなりとぞ是れ此國の帝王は歴代身体長大にして世のなみ人に異なれる爲なりとなん傳へ聞きけり又國王、の陵前には亞以利氏の墳塚あり其前面に布哇人民の最大恩人なる歐人とぞ鏤刻したり頓て拜觀も了りしかば妾等此地を船出なさんと定めしに親王始め其他の人々海岸迄も見送り玉ひて互に名殘を惜しみつゝ最と忠やかに別れを告げて滊笛の響を紀念に遺し波を蹴立て馳せ出たりしが頻りに濱邊に呼ぶ聲すれば船を止めて見渡すに小舟一艘忽にして漕ぎ來りぬ是なん同港知己の人々より美果蜂蜜などを餞せしなり斯る處に磯邊よ

り又も一艘漕ぎ來りしが是をも同じく長途の旅を餞けせんとて贈れるありけり長くもあらぬ滯留に斯く迄人に愛くしまれしは誠に不思議の身の幸なりける斯くて再び進航をなさんず處へ又もや聲を限りに呼ぶものあれば何事あらんと船を止めしに是れなん妾が衣服の洗濯を托くし置きしを打忘れしに今しも遙る〴〵持來りしあり其人情の厚きにと感じても猶ほ餘りあれば厚くも禮をぞ述べ遣りぬ茲より始めて氣力を増して馳せ行きしが不安土號の士官水夫は皆な甲板に打出で告別の信號をぞなしたりけるが船の港口出づる時燈明臺下に一隊ありて手拭振りて聲を擧げ海上無事を祈りたりけり時しも夕陽波間に沒し軟風徐々く煤煙吹きて布哇の嶋を後に見做しぬ

第十一回　夕陽將沈日本海　白雪巖顯水天間

水天一色波漂渺果てしもあらぬ太平洋を東より西へ横切りけるに漸くにして我國の綠林の司天臺より百八十度の緯度を航りぬ時しも一月十二日の曙空にて雲間を漏る、朝日影は又た我鄕の朝日影即ち時日と異にせず且つや世界の眞半分を航り過ぎしと覺へたりける左れば是より一歩とも進めば一歩我國へ近づくありと心地よかりき斯くて夜となく晝となく倘は進航したりけるに廿九日の午前四時頃水夫は高く呼はりて火山を見ずやと申せしかば頓て甲板へ登り見るに折節殘月輝やき渡り海面に立てる水烟と映合ふて一弓虹を釀し出せる其間に煙焰雲を燒き焦

がし時々激して鳴動なし火漿溶灰を迸しらすは恰がら飛泉を掛けしが如く人よ覺へず快と呼ばしむ是れなん東洋烏利（譯者申す此火山は伊豆の大嶋ならん）の火山にして高さは二千六百尺海上遙に雲を衝き風光奇絶言ふ計りなし頓て落日波間よ沒し返照彼方の雲井に聳へ白雪戴く一高山に映ろひ合ふて藤色よ染出したる其山は是れ東洋に名の高き不二の高峯と知らるれば山に連らなる一大陸も始めて日本を覺へたりけるそも此山名の不二といへるは無雙の山の意味よして連なる山脈千百の中よ峨然と兀立し其樣三角錐体の上部の方と少しく削り取りしが如く唯だ一點の凸凹なく白雪清く負ふたるは實にや無双の名よ背かずさて此山の出現は紀元前八百六十二年數日の間に湧

擧り斯くは大山なせしといへりもと此山わ大なる噴火の山なりしと聞けば火山脈絡の變動或は左る事もありしものにや此夜九時頃漸く江戸灣の入口へと來りけるよ滿灣一面漁火輝き恰がら一灣の火界を現せしに異ならず先きに他比丁港の漁火に何れも奇觀を愛でけるが今尚は一層の壯觀を極め遙に之を望む時は少こしだよ隙なき樣よ見へたりければ船の進むも如何やあらんと思ひ氣力を減じ徐々と近づく程に隙もあり又距離をもあれば心を打ち安らげて右へ左りと心を配り只管衝突に注意はなせしが此分にては着岸迄よ少くも一艘の漁舟は打沈むらんと心を疾ましぬそも此灣の海岸は最と險はしき小丘にして松柏森々生ひ繁り小村寺院の散布せる樣先きに見たりし此灣

の畫圖に少しも異ならず正午の頃ほひ漸くに横濱港え着したるが須らくありて一群の小舟漕ぎ寄せ來たり聲々に船内の縱覽をぞ請ひけるが中には船尾より攀ちのぼり或は艦へ綱を掛けなど種々と工面をなす者をもありければ番人一人付け置きけれど中々抵抗すべくもあらざりけり此時日英軍艦よりは各多くの見舞を受けぬ斯くて船内一同は端舟に打乘り上陸せしに無數の人力車夫にぞ取圍れけり此車は馬足を借らず人もて曳き行き二つの轅の間に在りて走り歩き時には緒を付け一人前立ちて之を曳き或は後より之を押す其疾きこと馬車の如し實にも奇妙の風俗といふ可し

明くれば一月三十日朝未起に領事巴留利君幷に巴克斯貴

女より江戸見物かたぐ訪ひ來れとの手紙を得しかば今日は横濱見物なさんと上陸し領事と諸共に先づ第一に骨董店に到りけるに日本工人の珍奇なる物品を製ずるには驚きたりけり就中最とも眼に觸るゝ者は僞古銅器僞古陶器の類ありけり此の器を作らんには先づ新らしき物品を荒沙等もて傷つけて圭角を滑らかにし如何にも年代經しと思はるゝ樣其外形をば粧ひ置き種々の藥品彩具にて鈷び色帯ばしめしかして後に磨き立てゝ名工妙手の名を銘し如何にも古代の名器と思はしむる如く製するなり其巧みなるに至りては老鑑の人々にても之を見分くるに苦しむとぞ是れなん美術の進歩とはいへ亦狡猾の至りにこそ其他古代の珍玩奇物目を衝くばかり多かりけるが是れ等

ハ大抵大名か寺院の内より賣りしありとか妾等も始めて此處に來たりし時にハ珍奇を愛づるのみにして是非眞僞をも見分かざりしが幸ひ委しき人の案内によりてかゝる羂にはかゝらざりにき叉漆器の鉢玉箱ありしが價凡そ五錢より數百圓までに至れるとぞ妾の其中見あたりしは二百餘圓の品物ありけり元來此國漆器を以て世に知られ殊に外人の嗜好するより價は格外貴くして一時ハ百圓より千圓迄にも達せしとぞ左れども古代の漆器杯は此國にても最と得難きことありとか聞きぬさるに亞骨克貴女の家にて最とも美はしき古漆器と見けるが是等ハ購ひ得たるにあらで帝室其外貴女達の贈與に出づるものありとか左れば其質極めて善美しく磨き出せる光澤は玻璃の鏡に向

へる如し又其堅きは爪にて推すも更に跡をもとめぬのみか打毀さんと思ふとも中々容易き業にあらず誠に永久の珍器を愛づるに足りにき左れども當時は此器の製造も大に古へに異なりて益す〳〵粗造に趣けるとか現に或る人よりの話を聞くに一千八百七十三年維納萬國博覽會に多く古今の漆器を出せしに其價相應はしからぬ高價ありとの惡評受けて遺憾にも再度本國へ持歸りしが其船江戸灣に入りし頃暗くれし巖に乘り上げて舟は其儘沈沒せしが其後二三の月數越へて積める荷物を引き揚げしに新製漆器は悉く原との白地に剝落し古製の漆器は依然として光澤換はらざりしとぞ然れば當時の日本漆器ハ工人精を欠ぎしものか但しハ粗惡とありたるかいづれにしても折角に

名聲博せしジヤパン(漆)の名よりも最とも恥づ可き事ありけり又此國の人々は我等の玻璃器を用ゆる如く什椀、器楪に數千年間此器を使用なしたりとぞ此日妾の一行は純粋なる日本の食物與し見なんと日本料理屋にぞ至りけるに接待人は女にて甚だ愛恭深き婦人なりしが頓て案内し奇麗なる疊の上へ進みなんとしけるとき妾等の穿ちける長沓をぞ取らしめけるが是れは至極の事にはあれど代はりに何か履く可きものを與ふ可きに左はなく其齒最と長く板に敷き列らねたる回廊打通らせしが折節冬の半にて爾かも寒む風吹き荒さめば手足も切らるゝ計りに覺へぬ借て案内せし一室は他の日本室と異なるなく種々美麗の木材を搆へて營みなせるものにして露臺杯をも具はりたり又其

各室を隔つるは細き木骨を編みなして扉の如きものを造り白き紙とば張り付けて(譯者申す是れ障子の謂ならん)敷居鴨居の間に立て嵌めて開閉思ふまゝなれば隣室を併せんと思ひなば之を開けば易やすく併せ得、閉づれば原との二室と分かれ戸傍に出て眺めなんと思へば之を開けば又出らるれば總じて家屋に窓戸なく往來出入眺望も最とも自由になし得られ大に利便の家と覺へぬ室には一面疊と敷きしが此疊と呼べる敷物は藁にて其体を造り成し上に一種の草にて編みなせる席を掩ひ長さ六尺幅三尺に定め家の搆造總て此れなる疊の大さと則とせしたれば實にも簡易の事なりとぞ又房室の一隅に一段小高き處ありて此處にも清らかなる疊を敷しかてこれを名づけて床の間とひへり

とは此國の古代には王皇等の靈を祀れる尊敬所にと供へしものと今猶ほ之を存して装飾場所となしけるなり扨て此の床の間には美はしき古銅の飾り物を置き又陶器の花瓶には最とも愛らしき花木を挿み壁には美麗なる畫幅を掛けたりしが是れ皆な四時の氣候により種々の古實の有る事とか聞きぬ頓て婀娜なる四人の女厚く綿の入りたる敷物を持出で又火鉢に木炭の火を容れたるを持來りて室を温め、そして其室の中央には一個の火鉢を置き周圍に四角なる格子を覆ひ之に蒲團を打掛けたるが是れ必竟火熱を保たんが爲めなり日本の家屋には大概は之の器を用ゆるを以て折には之を覆へし知らず〳〵に回祿の災起すこともありとか須くにして給仕の女出來り此れ等の品を取

除けて正飯をぞ捧げ出しぬ其臺盤としたるは六寸ばかりの足付きし小さやかなる机にて之れに一對の箸を添へ汁椀飯椀盃等をも之に置き客人一人毎に之を其前に据へたり給仕は例の四人の婦女にして妾等の團欒中に居並びて傍に火鉢を置きたるが是れ其酒を煖めつ亦た其携へし小さやかなる煙管にて煙草を吸はん爲めなりとぞ酒は麥酒に似たるものにて米もて之を醸し成し通常煖めて用ゆとなり又其盃は至て小さやかにして愛らしくぞ思はれけり其他料理に至りては妾等の想像もてすれば實にも不可思儀の者もありしが總じて料理の精を極はめ巧みに調理をなしたるものなり其膳部の略を擧れば汁、小海老、海草、玉子燒、貯蓄、揃衜、煎燒魚、赤根草、茗芽、生姜、鮮魚、芥子、水芹、山葵、醤油、玉子、

魚、菌類の濃汁、燒魚、油煎の鷄、筍、蕪菁と大根の漬物、特命大椀の飯、溫酒、煙艸、茶等の飲食品にて飯は大なる桶に入れ置き銘々の椀に盛り箸もて口に入るゝなり食匕や肉叉を用ゆる妾等には其持樣さへも得知らで困じ果てしが漸くに習ひ得て其巧妙に服しぬ料理の換はる度毎に年少かき女音樂につれ蹈舞をなして慰めたりしが音樂は俗曲なれば只だ單純にして情况らく歌は調子に能く合し婦人は容姿嬋娟にして蹈舞は能くも音樂に合し徐々と坐りつ蹁躚と立ち扇子を斜に携へ長裾を長へに曳きて舞ひけるは實にも溫雅にして奇麗なりしが蹈舞と云はんよりは寧ろ身振と名づくりべからん此日は舟に歸りて其翌日は一月三十一日なりしが朝たに舟より上陸し滊車に打乘り江戸に向ひたり

江戸は昔の名稱にして帝の此地に移り玉ひしより今は東京と名を呼びけり此東京とは東の方の首府と云へる語詞なり偖て妾等が橫濱に在りし時は猶ほ歐洲の一港に舟と繫ぎし心地なせしが滊車の東京に着きてよりは始めて異境萬里の心地せられぬそも此都は流石にも國王輦轂の下にして純粹たる日本の市街なれば見る者〳〵日本の人にて居留地外は公使の外唯一人の外人なくまれに歐人を見るのみなりけり妾等は先づ第一に停車場に最と近き一大寺院の殿堂を見たり(芝增上寺)これは是れ日本大君(將軍)歴代の墓地にて其土地非常に廣大に松柏森々幹を交へ深山幽谷に入りしが如く其殿宇の結搆など誠に豫想の外なりけり始め妾の考ふるに日本古代は天幕を樹木の間に懸ら

ひて野間に遊息せし民あれば今尙ほその遺風の存して寺院の建築などの模範となりしならん左ればこそ屋根は險しく垂らして柱も同じく天幕の支へ柱に能くも似て柱頭礎石をも見ざるべしと心に信じて疑はざりしに打て變つて今ま此れ等の建築の精巧美麗なる實に我々くを驚かしめたり其略を記さんに屋の內部は言ふに及ばず殿外欄干回椽杯に至るまで殘る隈なく彫刻し細々く密々く精美を盡し鏤め飾る金銀の光りは彩どる漆の澤と映り輝やき眼と眩し又彼方に揭げたる靈前の燈朦朧と金銀の飾り盡せる器物に反射し最と嚴に威重を示し思はず人に拜せしめり左れど其粧飾の風に至りては稍々野鄙の風もあれど其美術の精妙なるは今の工人の參考に供へ用ゆるに足る可からん

且つ聞く歷代大君の遺体は朱粉に埋め石を以て疊みなしたる棺內にありとか嗚呼數百年の昔より日本人民を奴隸とし正統天子を無き者にせし大君の斯る豪華を後の世に其儘殘し傳へたるは實にも過分の事といふ可し此府の市街の中央に帝の禁苑并に宮殿諸官省抔の設けあり是れ以前は大君并に其宗家の住居せし所ありとぞ內壕には漁獵を禁制なしたれば無數の鵞鴨漂々浮々心長閑かに遊び居けりかくて是より妾等は市街を所々く巡覽なせしが何も馬か又は馬車に乘けるに數人の馬丁後より見る〱妾等に驅せ越しけるが是れ等は車馬に付き添ふて日に十二三里を走り行けど左程に疲勞を覺へずとぞ又向ふより一輛の人力車飛ぶが如くに驅け來りしが乘せし婦人の着服は綺

羅錦繡の美はしく芬香四方に薫じ渡り面は粉黛施して頭は何とも形容の致し方なき髪結び花簪を飾り金銀の針の如きものをぞ挿みたり次に來るは六人の力士各甚たく肥滿して車に溢るゝ計りなりしが妾等の考へにては斯くては中々角力に身体の自由を得ざる可くとぞ思はれにき二月一日は旅裝を調へて江の嶋さして横濱立ちしが其出立は實にも哀れ可笑の破れ馬車に乘り頓て東海道にぞ打懸りぬそも此道は全嶋に行き通ふ國の大路にて十有餘年以前までは外人此の道に殺さるゝ者續々なりしが今早や既に世の開け斯る危難はあらざるなり偖て沿道の日本家屋は只一階の小屋にして僅か障子を以て外面を限れり此日は朝風入れんが爲めに戸々の扉を開放ちたれば庖厨臥床

も一目に皆な窺ふことを得たりけり左れども家々苑囿ありて小池假山を設けたるは實にも殊勝の至りと覺へぬ頓て野外へ進み出でしに小山の下に鑿石所ありて此寒む空も厭はで裸体にて立働きたり日本政府も近頃は外交次第に開くるより裸体にて市街を往来し又は戸外に沐浴するをも禁じたれども斯る田舎の場所迄は未だ法令の行はれざるは亦た是非もなき事にこそ偖て妾等は中頃よりして人力車に乗り換へけるに此日は天氣朗らかに温かき事初夏の如く車夫は満身汗注ぎ數々衣服を着換へたりしが此内三人の車夫ども最とも美麗に文身なせり別けて妾の車を曳きしは左の足より胸部に掛けて大木の盤りたる様を刺し右足は大なる扶老の鳥の翼を暢せし様を彫り裸体にして

倘は繍衣を纒ふが如く最も美くしく見られたりけり斯くていつしか江の嶋に着きけるが思ふに違ひし小嶋にて嶋は圓錐の形をなし松柏佛寺を以て之を掩へり濱邊は漁村散布せるが中にも重立たると覺しき所に車をとめぬ總て此處は漁村なれば漁具を暴らし海岸と積みいとも汚穢を極めたりけり頓て歩みて一寺に至れば眉雪の老僧出で來り妾等を山上に伴わんと各自に杖を與へけるが是れなん坂路の險しければなり漸くにして頂上へ迄經登れば下も海水を距ること五百尺ばかり上に一の祠あり又其傍には一大洞ありて其樣最とも奇觀を究めたり頓て茲をも立ち出しが此處の邊りに大佛の最と古きより存せりと聞き彼處を指して趣きける此地は古へ鎌倉とて一大都會の土地

ありけるが今は甚とも零落れて唯小やかなる村落のみ然るに獨り大佛のみ原野荒草の中に獨立し一盛一衰定めなき世の變遷に關はらず依然形ちを更ためざるは是れぞ所謂佛說の無言の力の最上にて大風雨雪の中に立ち威儀を換へざる盤石心は現にも衆生を濟度すべき歟但し此國傳來の宗教ある彼の神道の信徒等が人の心を鏡に比喩へ頑民輩を迷はすよりは遙かに優りし事にぞあるなれ（因に云ふ此の大佛は耶蘇紀元一千二百五十年より六十年頃の鑄造にして高さ五十尺眼は金にして額上ある螺形の角は銀以て造れり是より妾等歸路につきしが山路に駕を荷ふを見たりき聞く古代日本の王侯より下醫師抔に至るまで一般之を用ひたるを近來人力車の發明にその須用をば奪は

れたりしとぞ世運の進步實に喜みす可き事にぞあれ

第十二回

城壕注レ血幾萬人　倘爲高閣表二佛功一

夕陽芙蓉の嶺を染めて碧水萬里の空と浸し漣波さへも立たざれば晩れつく鐘と諸共に橫濱の港を舟出して航海二晝夜恙なく此國著名の良港なる神戶の港に錨を卸しぬ是れなん二月五日午前七時にぞありたりける時しも英國公使玻禮巴克斯君より來狀あれば何事にやと封押し披けば今日幸ひ日本皇帝陛下の臨幸ありて市街もいと賑へば急ぎ上陸して奉迎せよと書きたりければ取敢へず上陸せしに停車場は種々の草木と以て之を蔽ひ又皇帝の行宮は綠り滴たる草木の枝梢を集めて蔽ひ飾りそが中央に飾花も

て龍蝘鳳凰を編み出せるは恰がら生きたるものゝ如く燦々く實に人目を驚かしめたり又天幕は菊花の徽章を付したりけるが是れ帝室の記表なりとぞ偖て此幕の四方は開きなれば内部は悉く窺ふを得たりけるが席には一面赤色の敷物と敷き一段高き處に彼のプラッセル製の毛氈と布きたり是なん即ち玉坐にして上には龍蓋優やかに打垂如何にも莊嚴にぞ見へたりけり塗無弁に船中の人々は公使巴克斯君と共に玄關の傍へに迎へ奉り妾小兒等は外國人へ供へたる假室にてぞは扣へ居りぬ日本奉迎の群集は今日こそ晴れぞと着飾りて膝を屈して地上に坐し只神聖帝の龍顔を拜し得なんと待受けたり此群集中の大半（男子）は前顱を奇麗に剃り落し後方に豚尾の髮を結べり又其女子は

鼈甲留針花簪杯と以て頭を飾り大概は紺色の衣服を着なし小兒は赤き衣をつけ其他千態萬状種々様々の粧ひなして停車場邊立錐の餘地なき迄に群り來れり頓て聞ゆる號砲は天地も裂くる計りなると均しく奏づる樂隊の音響につれて皇帝は天顔麗はしく玉坐に就かせらる後に從ふ諸大臣各國公使貴顯の人々井然列を正して進み出たり中にも多くの供奉の人は歐洲風の官服着し意氣揚々と四方を拂ひ金の「レース」（縁飾）は燦爛と眩ゆき計りに見受けられにき左れど是れ等の人々は今日始めて歐服を着したるか但しは衣様を辨へざるか何となく其風体の可笑きには暫らく腹を抱へたりけり妾此時以爲らく斯る見にくき樣あるを彼日本守舊の人達の見たらんには定めて己れの頑固に

誇るならんと聞く昔時此國貴顯の禮服は皆な錦繡の衣胞にて袴は長く三四尺をも引き廻し衣袖の長きは蝴蝶の如く頭に小やかなる峯形の冠を戴き彼の豚尾髮を掩ふたりしも悉く是れ公侯貴顯を表示するの形容なれば國人之を貴みて何れも羨望なしたりとぞ、斯くて皇帝着御あると均しく衆庶は三方に退きけるが此時我公使巴克斯君は祝詞を朗讀されしが神聖皇帝此答詞ありにき次で神戸の縣令祝詞を讀まれしに妾は實に笑止に堪へ兼たりそは縣令の朗讀中至尊に咫尺されし故にや手足は素より身体迄戰々くとして震ひ動き頭に戴く冠の今にも落つ可き有樣のいとも見苦しかりしを以てなり頓て讀了りて滴たる汗を拭はれしが定めて擔ひし盤石を打御したる心地せられし事と

覺へぬ儀式了りて皇帝は大臣參議を從へて錦旗を風に飜るがへし繡帳内に入御ありて間もなく一發の號砲響き西京臨御の報ありければ妾等も亦た送り奉りぬ了りて兵庫の所々を巡覽せしに何れも粗造の日本家屋のみ軒を并べ記す可き程の事あらざれど神戸は之に相反し横濱港に讓らざる繁華を極めし勝地にて歐洲風の建造物の巍々と白堊を峙てたるは眞とに目覺しくぞ覺へたり殊に此日は皇帝の臨幸ありしを祝せんとて戸々の軒簷に釣るしたる球燈千百數知らず輝やき合ふて空ら照らず月も光を失ふ計りありしは一層目立ちて美觀ありき六日の朝妾等も亦た西京に趣きなんと停車場へ迄到りけるに折節し微雨の降り出て霏々と衣裳を濕はし懶きと限りなかりき頓て鐘聲漸

車を進め瞬時に西京へとぞ着したり此沿道の人々は何れも高き履物穿ち紙以て造れる雨傘持ちしが斯る姿は萬國を周ねく廻りし妾の眼にも未だ觸れたる事なかりきそも此西京といへる都は千年餘りの昔迄は此國皇帝の宮居とば占めさせられし處なれば國の古代の有樣と其儘傳ふるそが中にても取別け人の風俗は實にも此の國固有なる風習のみを遺存して波濤萬里の孤客にさへも一目東洋の人ありと自づと感を起さしめたり妾の着せし旅館をば其名を丸山と呼なして其名と同じき丸山といへる小山の山腹に營み成せる高樓なるが先づ其門邊に到り着けば數人の奴僕等出迎ひしが彼の國人の禮として頭を下ぐるを常とすれバ低頭平身恰がらに蛙を踏みて拙ぎし如く恭敬面に

顯はれける良ありて一室へとぞ導きけるが室は清潔便利にて寢室には臥具枕衾と具さに備へ食堂には椅子卓を多く安じ各室煖爐を安置して肌寒む時を忘れしめ其他粧飾器具など殘り置きなく施して少しも遺憾の事なかりしは開きしに勝りて完美ありけり又其窓間より眺望すれば滿都の街衢一眸の下に集るそが中に殿堂高く聳へ庭園廣く横はり峨然として松杉の間に顯はるゝものはこれ其昔の王城あり琉璃碧と漾はし漣波天際より來り蜿々として青虹の地に印するが如きものは是れ鴨川の清流なり所々の遠山白雪殘り滿都の暮烟斜陽を沒す折ふし鴻雁高く叫び祇園精舍の晩鐘鳴々と鳴り渡り快爽幽絶言はん方なし翌日祇園の堂宇を遊覽せしに其壯大なる其觀美なる畫工も

筆を拋つ計り又た夥多の僧侶の邸宅は比々と軒端を列ねたり昔和蘭陀國の通商使節久しく茲に因はれて恥辱と甚たく蒙りしのみか歌諸に迄ものされしを思ひ出して感を起しぬ此處にて我國公使なる巴克斯君に邂逅なせしが氏は大に妾等の爲め盡力されたり元來日本に妾等如き商船にもあらず軍艦にもあらぬ遊船の來りしは實にも稀有なる事にして一千八百五十八年我國女皇陛下より此國大君え贈物遊ばされたる其時に始て此種の船來り其後ち妾の乘船なる三微無號の着せし外絕へて來着せしとなければ日本官吏は審かしみ五月細迄に問ひ糺し税關官吏も今少しまで干渉なさんとせし程なるが巴克斯君の盡力にて漸く無事に事を濟ましぬ此時同君妾に謂へる樣日

本開化の進步非常に鋭どく實に驚く計りにて僅か數年の星霜中に斯く迄文化の進みしは歐州文明諸國にも未だ其比を見ぬ程なれば今此國の現况を御身が細かく記すとも數年の後は跡方も無く空しく笑の種子となるらんと其外種々の物語を聞き向君其他の紳士二名と共に馬車にぞ打乘りて知恩院へと趣きぬそも此寺ハ此國の名たゝる古刹の其一にて一千八百六十八年外國公使え此國の皇帝陛下の謁見を始めて賜ひし其時の旅館に充てし處にして實にも此國今日の文化の糸の緒にて亦た歐人も一層の感情發ゆる所なり巴克斯君は種々の廣間に導きて庭園樓閣を示してより此寺の法會を見たりしに十二の僧侶は圓坐して大部の經典を誦讀し清淨の音は銅鑼太鼓の音いろに和し

燃香の香り四方に薫らし暫く佛像に向ふて誦讀せり、日本政府は令を發し神道を以て此の國の國教なりと定めしよりは佛教大に衰頽し僧侶の不平は大方ならずとなん傳へ聞きけり。夫より院内の小丘に上り一大梵鐘を見たりしが此梵鐘は日本にも第二に位する名鐘にして一と度之を撞き鳴せば美音頋々として市街森林も餘響を受くとぞ實にも古代の遺物にして此國内の寳といふ可し斯くて此寺を立去りて西本願寺に到らんとなせしに恰かも日本皇帝の先帝陛下の廟臺をば參拜せらるゝ折に當りて兵隊街衢を護衛して道路の通行を禁じたれば妾は諸所と迂回なしぬ因に記す元來日本皇帝は其神聖なるの故を以て宗教勸務に怠りなく平常諸所の拜所に趣かれ政治は大臣參議ありてその方針を定むるとぞさるに此時西南に一とつの一揆起りしとて三條岩倉の兩大臣俄かに東京を指して此地を出發したりといへり斯くて程なく西本願寺へ到りけるに同寺は一千八百六十四年圖らず回祿の災ありて過半は燒失なしたれど尚は妾の見し殿堂は其中屈指の美觀と聞しが滿堂總て彫刻を須ひ其門扉迄も菊花を彫り付け精巧美妙を究極せしが是れ二百年前の建築なれど却て今時の名巧も啞然たらしむ計りに見受けぬ巴克斯君は豫て妾を饗せん爲め其接待の用意忠かなれば靴脱ぐ勞をも省かんと滿堂到る處花氈を敷き詰め厚意到らぬ處なかりし然れど方丈の不在にて談話なす事得ざりしは誠に此上なき遺憾なりける因も此宗教は日本にて八宗派ある其が中にても

最とも勝れし宗教にして其說く所に至りても我耶蘇教よも勝りければ若し耶蘇宣教の法を以て此派の宗教押し擴むれば如何なる盛大よも至り得なんと傳へ聞きぬ斯くて此寺の付屬なる寺房珍器奇寶など見了りて庭の方へと進みしに小池を穿ち小杜を架し假山小亭能く天然の美景を寫し妙絶奇絶言はん方なしそが中にても取り別けて世にも珍奇と賞でらるゝは彼の此國よ名の高き英傑太閤の一小榭なるが妾は此處にて公使の饗を受けぬ頓て了りて此處を出て此の府の府廳を巡覽しけるが是なん素と大君の宮殿にして三派の流水に取圍まれ最と壯嚴に見受けられしも今は府廳と化し果しあり元と大君は江戸に在りて無上の主權を握り居れど此處には正統主君のあれば謙遜奴僕に均しかりしも其實己れの四隣にも劣れる計りの有樣なりしが近世日本の人民も三百餘年の壓制よ殆んど堪えずやありたりけん勤王黨の四方よ勃起し勢ひ甚たしく遑しかりければ時の大君斷然と心を政權の拋棄に決し臣下の死と以て諫むるをも顧みず握りし政權悉く正統天子よ奉還し今尚は東京の片傍りに餘生を樂み居らるゝとぞ是より近かき年までも帝の住居せられける舊の皇居へ趣きけるに宮殿庭園の壯觀奇麗筆紙の能くも盡し得可きよあらず又此處に多く大閤の遺物を陳じたりしが中にも鬚切膝切と呼べる二刀は世にも得難き利刀ありとぞ此處にて巴克斯君と手を分ち尙は諸々の寺院舊跡などを經回りて最後に按內者の導くに任かせ名高き質屋に到り見るに玆には

古代の珍寳奇玩處狹き迄陳列せしが中にも金銀彩糸などを以て最と麗はしく繡飾したる古びし衣胞のありぬれば一々之を問ひ紀せしに皆な是れ往時の朝服なりとぞ中にも取別け美しきは十二宮女の官服なりけり元來西京ハ欧人通行する事稀れなる故にや妾の一行見まほしと群がる人は山の如く中には數里を隔てたる朋友知人に報知して諸共見物に出づるなど事々しかりしとなりとぞ左れば妾も從僕の助けを受けて漸くに市街を歩む事を得たりき八日の午前滊車にて神戸に立歸り公使を始め其外の知己の人々と船へと招し一小宴とぞ催ふしたり九日再び上陸し滊車に打乗り日本の維新なりと世に賞賛やす大坂さして趣きしに此地は川流縱横に流れ注げる其間に無數の橋

梁架け渡し街衢は平坦砥の如く水陸運搬無類の地なり妾等此處に着せしより先づ第一に眼に觸れしは彼方に聳へし一官衙ありしが是れ多くは兵營か又は警衙にもや有る可らんと思ひ得らるれば頓て彼處へ到り見けるに果して大坂鎭臺にして大坂城の跡に據り其が營舎をば營み造れりそも此城は日本にて古今無双の大英傑豐臣太閤といへる人天下の力を究極し建築なしたる一大城なるが其後ち數度の兵燹に或は燒け果て或は壞はれ今は僅かに內城の一部と存するのみなれど夫さへ規模の廣壯なるは實に妾の胆を奪へり殊に其が外郭の石垣などは一石長サ四十尺高サ三十餘尺に至るもの疊々累々疊み上たるは往昔器械の具はらざるに如何なる手段以て疊みしにや誠に人業と

は思ばへざりけり妾此の兵營に至りし時は何にか遲疑し
て容易くは容るを許さぬ様なりしが稍や暫くして許容を
得城郭内へ進むを得て既に第三塚を打過ぐれば兵營長く
軒端を並べ兵隊多く練兵したりそが中央と覺ぼしき處に
いと古びたる井戸と小やかなる塔のごときもの尙ほ存在
しつるが是れなん太閤住居の一部なりとぞ此塔上より眺
望すれば遠山依微として雲間に連ちなり川流滔々として
幾百派となく滿街を繞り流れ又東南廣濶千里の目を究め
得可く神戸の沖紀州の岬悉く一望の下に集り快爽言はん
方もなかりける又其市街幾萬の家屋の中に拔ん出て宏壯
美麗を究極し數箇の烟筒黒烟吹きて雲かと訝かる計りな
るは是れ此國の造幣寮なるが其規模盛大結構偉麗なるは

我倫敦の造幣寮と少しも異なる處なく盛に貨幣を鑄造せ
り元と此大坂の土地柄は日本全島の中央に當り商賈市場
の中興にて爾かも運搬の便り好ければ此國革命の時に當
り此處と定めて首府となさんと擬ては壯麗極めたる造幣
寮をも置きたりしが帝の東上ありしより終に計畫ならざ
りければ今は政府と懸け隔たり大に不便を感ずるとなん
此地は人形及び演劇の最も多き處なれど今より一年半以
前悉く回錄の災に罹り今亦た見る可きものなしとぞ十一
日神戸に歸りけるに此時我國人士列祖氏は此地に在りて
日本固有の美術をしてそが衰頽を復さしめなんと盡力な
せり夫より妾は市街を見廻り矮鷄及び小さき日本犬、金魚
などを購ひ求めて本船に歸りぬ、

第十三回　辰氣樓頭意欲迷　客船房裡夢一場

明くれば二月十二日午前四時頃纜解きて神戸の港を出行きしが此日は天氣朗らかに空らに一朶の雲さへあらねど逆風甚だしく激しくして明石の海峽に至れる頃は全く進まざるが如く姿の乘りし三微無れ一時に九英里の速力あれど此時僅かに一英里を駛りしのみ斯くて播磨洋に至れる頃は船の動搖甚だしく碎くる浪の甲板上に迸しるを度々なれば一と度神戸に立歸り風伯怒を收むるを待ちて再び船出なさんと艫を後邊へ向け換へて此日の正午恙なく再び神戸の港に着しぬ灣內數多の船舶の風波を避けて錨を卸し舳艫を此處に集めたれば船の衝突覺束なく最とも

心を惱ましめしが姿は早くも小舟に打乘り陸に上り餘事は水夫に委ね置きぬ斯くて月の社（譯者按ずるに蓋し布引の瀧ならんか）といへる瀑布を遊覽せしに滿地は一面雪以て掩ひ兩傍二派の流水は悉く凍つて鏡の如く瀑布は總で氷結し長さ六尺餘りの大氷柱幾百となく立列らなりて恰かも水晶と編みなせる一大簾を懸けしが如く斯る冱寒の土地なるに異形の果實は紅白の色を交へて咲き亂れ橙橫枝を垂れて果實其下に結び顆々纍々黄色麗らかにして何れも斯る寒さをば知らず顔なる有樣なりしが我國にては冬の日は種々の方法を施こして繁霜積雪の防禦をなすを斯く霜雪に暴露して向は嫣然と花を開き實を結ぶは誠に不思議の事にぞあるなれ日暮に及びて漸くに風力少しく減ぜしかば船出

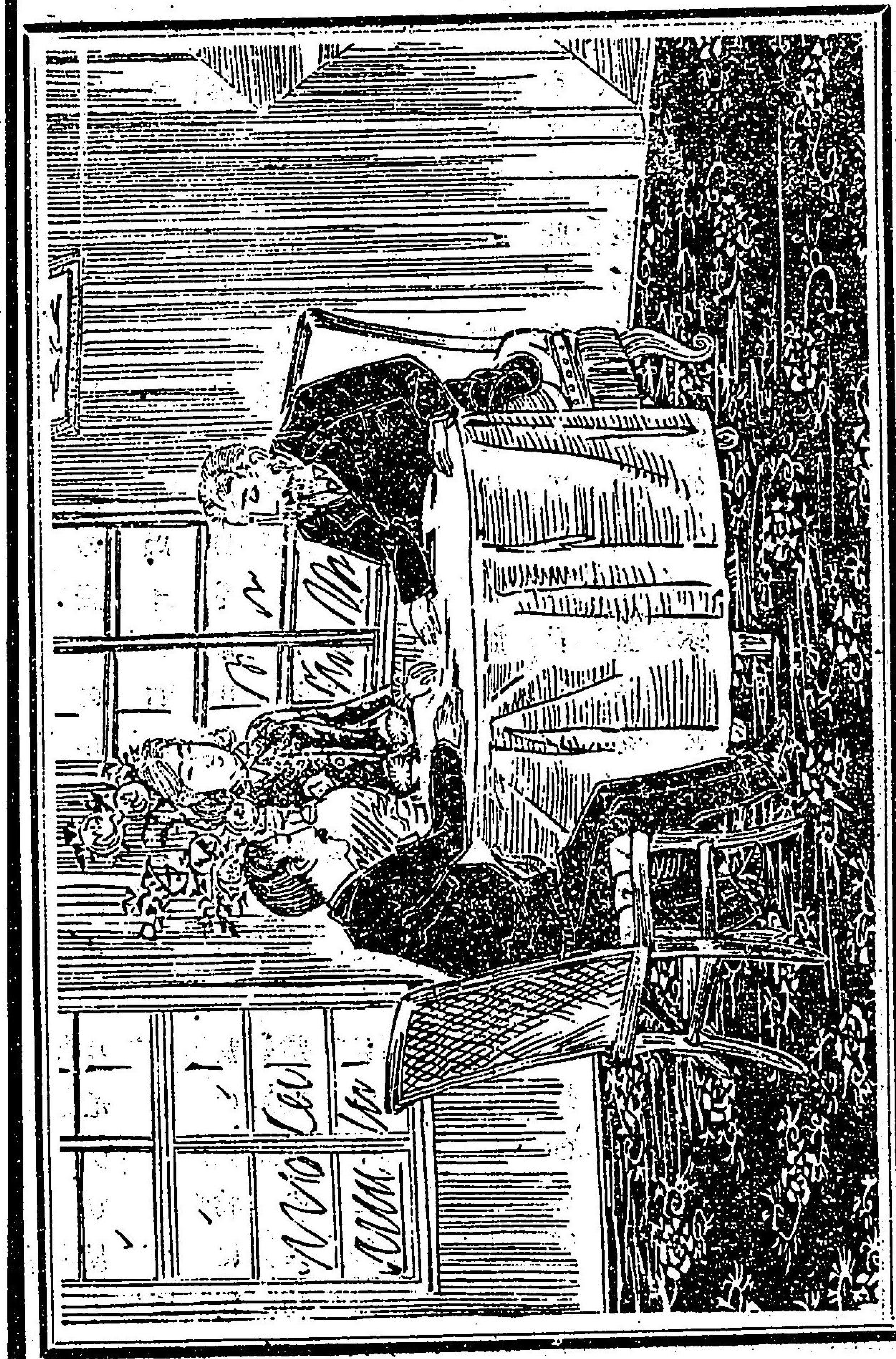
の用意をなしたれど翌朝再び風起り昨日より尚は烈しければ寧ろ船出を止まりて何れか勝地に遊びなんと即ち船出を思ひ止みぬ頓て領事君の先導にて有馬の温泉に遊ばんと腕車を雇ひて打乗りしに此日ハ寒氣烈しくて肌を砭さす計りなれば車夫は妾の打乗る迄は路傍寒氣に堪へかねて戰ひ慄なぎ居たりしが始めて馳走を試みしより流汗淋漓身に滴り此寒風も厭ひもせで各其衣を脫したりける此日は日本の正月元日（按するは夫の陰暦の正月元日ならんか）にて沿道の家々は悉く新年賀する意を表し神棚等をも美々しく装飾し飯酒菓實を供へ捧げ各手を拍ち神を祈れり是なん正月元日ハ諸神民家に下降して供物の精を食するとの意ありと言へり妾等此處を通行せるも均しく沿道の人民ハ食事を抛

ち遊戯を捨て爭ひ出で丶見物し小兒は多く車の邊に彷徨び中には恐懼をなせしにや頻りに泣き叫ぶ小兒もありにき是れ等無數の小兒等は總て紺色の上衣を着し下に赤色の衣服を着成せり又其腰の邊りには繡箔もて飾りなしたる寛帶纒び頭に花簪を揷みたり斯くて三時間餘を經て漸くに有馬の溫泉にぞ着せしが此地は諸山の中央にありて山岳四方に峙ち連らなり澗流夥多縕繚し滔々滾々と流れ奔り谿角屈曲する處一ヶの溫泉湧出し後は竹林鬱々蒼々として生ひ繁り一小澗流を抱き掩ひ其風流雅致の愛つ可きは未だ妾等の見ざる所なり偖て此谷間の人民は各々竹の細工に巧みにして是れ以てぞが生業となせば竹籃竹籠精粗大小着色純質思ひの儘なる品物あり妾は是等を見了り

て清らかなる市街を通り過ぎ一の茶店に趣きけるが此の茶店は頭を美くしく剃りたる僧の所有にて妾等此處え入りし時には大に歡び合へる面貌にて出迎ひ頓て手を拍ち下婢を呼び一室へとぞ誘はしめたりさて此家の結構は清潔閑雅言はん方なく庭園には假山小橋など搆らへて最と愛らしくぞ見受けられにき妾は始め此地に入るや先づ温泉場を閲覧せしに長方形の筧ありて鑛泉その中より浴函へ注ぎ其色黄にして鐵氣を帶び熱度は一百十二度を保ち入浴の時至れば浴客此内に充滿し樽に青魚を詰めしが如しとぞ左れど妾は只二人の浴客を見しのみなりしが皆蒸騰なせる熱湯中に悶と沒する計りに沈めて浴し居たりし妾は夫より竹籃店に趣きて種々様々の品物を購ひ程なく

慚愧々々

歸路に就きしに竹器の嵩さの多ければ車の中心失ひ易く大に車夫の煩を增しぬ十四日瀛灌に火迄も燒きけれど風浪又も起りしかば此日も船出と思ひ止み芝居の見物に趣きしに滿場立錐の餘地なき迄に群集し各辨當其外の食物などを坐前に列らね空氣の不通を究めたる其が中に何氣もなく見物し餘念なきが如く見受られたり藝は左程見惡からじ其衣服は甚はだ美麗のものなりき妾は長くも見物なさで此處を立出て領事君の許と訪ひけるに折節居留地警察署長の居合せて共に談話をなしたりしに當時此國の西南に起りたる暴徒の一隊頻に東上の模様あれど賊徒の目的は神戸にあらで當時大坂に在ませる皇帝陛下を奪ひ去りて天下に指揮する事にあれば假令東上なしたりとも



此地は左程に殘毒流ざるまじと人民各安堵せりと語り合たり十五日に至り風浪愈收まりければ神戸の港を船出して頓て明石の峽よかゝりぬ此處は名にあふ勝地にして彼の美景を以て世よ鳴れる斯搭蘭の南の岸邊或は北極地方の不郎傳嶋南米最南の馬日耳蘭峽にも相敵すと云へど折節雪の降り積りて風色確とは認め得ざれど青松一帶海邊に連らなり雪か眞砂子か白波の打寄る磯邊一面に白妙なせる有樣は實にも美景と思ぼへられしが斯くて播磨の灘をも過ぎて稍や廣潤なる海原へ船は進みて出たりしに左舷に當りて數多の島嶼波間に浮み出けるが中にも一層彌や高く樹木蒼々と生ひ繁り雲井よ聳へし小嶋ありしに船は左舷に之を見て白波蹴立てゝ進みけるよ妾は此時疲勞の

爲めか現ともなく眠みけるに船はいつしか先に見し一小嶋の北の方へと着せしかば程なく妾は上陸なせしに全嶋一つの高山にして怪巖奇石を疊み掛け松柏欝茂之を掩ひ山麓に一ヶの大厦ありしが是なん神の社と知られ海中遥かに華表ありて高は數丈大きさも是に稱ふて大きやかなるが峨然と雲表に抜ん出たり左れば妾も社殿に登り遠ち近ちと見渡すに其規模廣大なる實にも心を奪はる計り全殿總て海中に浮かみ床下は滄海汪々として碧を湛へ殿傍の回廊は屈曲縈紆蜿々として數町に連らなり社頭遥かに殿内望めば行人微にして豆の如し其廣大推して知る可し又其が建築は極めて古雅にて材堅く彫刻畫圖の力を假らず全殿自づと莊嚴なり又其風色は絶佳にして夕陽一葦の

水、北に峙つ山の端に入りて返す光りを眞帆掛けて浪切る漁舟に乘せ得けり顧みて又殿内望めば漣波徐づかに回廊の玉欄に打ち碎かれて白玉碎く浪の花縁を湛へし滄海原に雪迸しる計りあり頓て黄昏頃となりぬれば社殿は素より數町に連なる彼の回廊の軒端にも忽ち點燈せしかば床下を流るゝ潮と映じ千點萬落浮々沈々金龍翔り銀波破れ風光明媚筆紙にも盡し得かぬる妙絶奇絶賓無氏をして此景を描寫せしめんものと後を振り顧へり呼ばんとなせしに如何にしけん今迄も伴ひ來たりし多くの人々何れへ行きしか影だに見へず妾一人悄然と社頭の燈籠に凭り居しかば餘りの不思議に暫しの間只茫然たる計りなりしに折節し今迄滄海原と見てし處も何つしかに眞砂子に埋もる

濱邊とありければ愈よ奇異よ打驚き魂も消へ入る計りなりしが漸くにして心付き伴ひ來りし人々を彼處よ此處よと尋けるよ呼べど答へず尋ねて居ねば止むあく陸に上りて磯へ探り〳〵に歩み出づればてはそも如何よ妾等の乘りて來りし端舟は跡方さへも留めざれば如何はしけんと沖を見渡すま沖ま扣へし三微無は既に錨を捲き揚げて滊笛一聲今にても進航なさんず有樣に周章狼狽めき呼び留めんと聲張り揚ぐる折しもあれ早や馬關に着きぬ起き出で賜へと呼ぶ聲の微かに耳よ留りしかバ始めて眼を開き見るよ將さよ是れ船房一場の夢よして身は尚ほ三微無の一室よ横はれり左れど聊かも見もし聞もせざる況と夢よも見る可き謂れあしては何處よして何と名づくる處やらん

と考ふるよ是ぞ所謂日本三絶景の其中ある嚴嶋にぞありけるが如何よして亦た妾の夢に入りしといふよ先に神戸に在りし日或る知人の語れるには是より歸航の途次嚴嶋と呼べる一嶋の沖を過ぐ可し左れば必らず一度は船を寄す可しそも此嶋よは一ケの祠ありて昔前後よ比類あき奢侈と極めし宰相の豪華の餘りに營みける實よも壯大偉麗にして且又當時の奇巧を極め爾後の宰相大君あども之を保存し裝飾し多少の美觀を添へたれば只だ壯觀と愛づるのみか此國往古の建築技工を一目觀下に洞看するには之に増したるものはあらじ且つ風色の絶佳ある此國三絶勝の一あれば必らず之と賞觀す可しと懇ろに語けたる上尚ほ一枚の繪圖をも與へ其搆造風色あど悉く語り聞ければ

妾は神戸を出しより只だ之をのみ見まほしと餘念もあらず在りたりしに彼の眠ろみし折なども既に嶋端の見へければ船を彼處へ寄ばやと彼の圖を繙き船付き場など調ぶる中甚たく精神の疲れけん我を忘すれ眠みければ扠ては圖面と話と共に自づと夢にや入りしなるらん頓て馬關に上陸せしに日本西南に暴逆の輩亂を起してより此處は摳要の土地に當れば兵隊夥多充滿し不虞の備へぞ嚴かなりける左れば人民は大に恐れ一同負担し家を出づれば妾も此處に止り兼ね頓て船出の用意を調へ馬關を跡に再びも大平洋へと浮み出けり此時妾は他の人々に告ぐる樣此の後ち冬期には再び日本へ來たる砌れ斯る季候に遭遇しなば滿目の風物一として心を悦ばしむるに足るものなく

又家屋にまれ車馬にまれ只だ〳〵不完全にして用をなさず假令內地を遊覽するも愉快を心に感ずるよりは寧ろ慘憺の感を惹くのみ但し今日の不完全なる樣を見んとならば多く月日を經ざる中再び渡來せざらんには今の慘憺たる感あるものは異日感賞の具となる如く看理に面目を一新す可し元來此國の人々は自ら發明するの力に乏しく他の發明を模造するに最とも巧を究めたれバ我歐人の精神込めつ腦力凝らして漸くに發明なせる技藝學術も今の景況以て進み行けば多年を出でず習ひ得るらん扠て之を習ひ得れバ又歐人に用なければ夫の頑固黨の勢力を得て鎖港の說を唱へんも計られず左なくとも日本に外人を雇はざる樣になり行々は自づと鎖國の体をなすべし左れば後年

此國へ再び來航なし得可きか得可からざるかはたよし來航なしたりとも日本今日の勢もて駿々として進化し來れば數年の後は東洋に一つの歐州を現出し之と見るとも聊かも心に異境と思はざるらん左れば此國へ渡來して其の純粹の風土とは探らんとする妾等には慘怛極まる今日こそ却て便りも得安くして亦た格別の異觀も見を得たるとはあるらんとなん語り合ひける

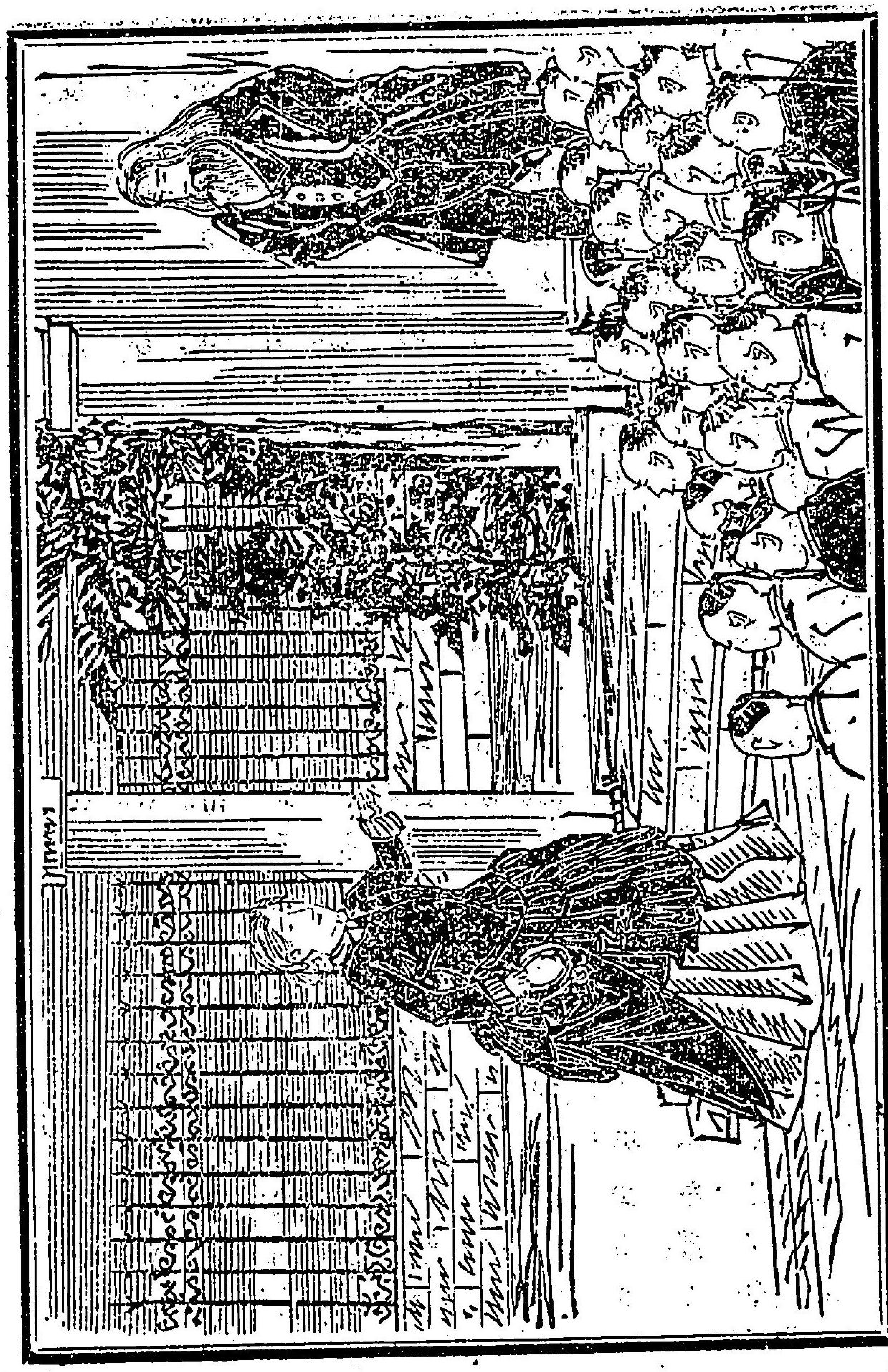
第十四回　小艇為レ家任二去留一　恰似無情人無レ定

斯くて三微無は支那を向ふて進航したりしに廿一日午前四時香港嶋の東端なる燈明臺下を過ぎ去りて哥倫峽を溯り普通一般香港府とぞ呼びなせる維土利亞に着したりけるぞも此の哥倫と云へる峽は香港河口に當れる地にして河岸は山岳突起して嵯峨たる山脈數里に連らなり影を倒にして碧水に映ずる樣は實に絕佳の風色なりけり又この維土利亞の港には「サンパン」と呼ばれたる一種の船あり兩端尖りて遮陽を備へ割烹調理に至る迄一家の需用悉く舟にて充たし更に家屋に異ならざれば此船内に身を終ぶる迄黑土を踏まずに死する者ありとぞ實にも奇妙の慣ひと云ふ可し斯くて妾は港畔なる一つの土堤へと上りしが此土堤長大なると甚しく市街の果て迄で打續き堤上諸官衙諸倉庫など建て列らね其名を普剌亞と呼なせり頓て市街を見物なし〳〵後に一帶の山と帶び高きに據かて搆へたる家屋は概ね美麗にして中にも歐風摸せしものは總て

石にて疊み造れり又一層の高所にありて華麗四方を輝やかし眺望最も佳絶なる一大廈ありしが是なん此府の政廳なりける又そが後背の山巓に一小家屋の設けありて茲より港内見渡して船の出入の信號をなせり妾は是より市外に至り維土利亞の競馬を見しが馳驅甚だ見る可くして見物も亦た山を築きし如く實に盛大を極めたりけり始め此地へ着せし時には斯る山岳疊々と圍繞なしたる土地柄なれば平夷の土地はあらざる可しと思ひしに今此競馬をなせし馬場は郊外凡そ二里計り掛隔たりし谷間なりけり

廿七日の朝夙に此府の知事亞撒君を訪ひたりしに此地植民の景況など事細かに物語られぬそも此維土利亞と云へる所は三十年の昔迄は荒蕪不毛の瘠土なりしが我國一と

度植民の緒此に繙きてより次第に土地は繁昌し今早や一つの都會をなし大廈高樓巍然と聳へ道路園囿の奇麗やかなる實にも猶く計にして捨ても拾ふ者のなき蕪野荒田も今日は土一升を一升の黄金に換ふることとなりしは我國當路の人々の勸奬保導の其路を能くも得たるによるなる可し又此土地の植民人或は兵士の面貌見るに皆強壯に活潑なれば氣候も相應せしものあるならん去れど此地の一の不幸は時々大風吹き來たり一陣拂ふ其下に夥多の家屋を吹き潰ぶし巨萬の財産數千の人命一時に壞滅し果つるなり此の災害は外々の水害火災と異なりて如何に心を摧くとも防ぎ得可きにあらざれば人々之を痛み恐るゝとぞ左れど强しとはいへ風力なるに鐵柱碎け家屋飛ぶとは實に



も思ひの外にして信ありとは思ぼへざる計りなりとの朝亞撒君の旅立ありければそが餞別の禮式ありけり是あん此地支那人一萬人の敬意を表せし禮儀にして此地最大の禮儀ありとぞ偖て其が餞別の品物は一萬本の蝙蝠傘にてありけるが大なる樟以て造れる函に收め又其祝詞は金糸絹糸を以て全く文字を縫出し是れも同じき函に容れ函は緻密に彫刻したり正午に至り四十名の名代人各漢英兩字を以て記したる朱色の名刺を差出して案内を乞ひしが總て是れ等の人々は廣大なる饗應室にて接待れしが支那の卑屈の例として斯る公けの宴席へ婦人の立入るを許さゞれば妾は數室を押し隔て之を窺ひ見のみありけり支那人の住所は植民地よりは少しく隔たりし所にありて其街

衢の廣きにも拘はらず不潔雜鬧を極めたり又其が家屋は種々の彩色もて華美やかに塗り飾り門前に表札廣告などを掲げ出せり斯くて妾は此地の劇場に至りしにこは市街の中央にありて男女の觀客群集したり妾等此中へ入ると均しく一つの箱と持來りたりしが是なん椅子の用に代ふる爲めなり土間は男女の差別なけれど棧敷は男女の區別をなせり扨て此日演ぜし外題は韃靼の戰爭記にして韃靼の大將そが妻子は軍に打負け逃げ走るを敵に逐はるゝ一段なりしが戰爭の幕は別幕に演じ各大聲叱呼激戰をなす樣を寫せり衣裳は稍や奇麗なれど鬘は極めて粗笨にして音樂も亦た不調子なりけり斯くて三月一日に至り維多利亞を船出して廣東河口に至りたるに此の河は水底淺くして航海船は入り難ければ茲にて一行引具して「キンシヤン」となんいへる船にぞ乘り移りぬ此船ハ元と米國の川蒸氣なりしを此處へ購なひ來りしなりとぞ偖て其最下の船室には下等の支那人八百人計りを載たりしが是れ等は皆鐵柵中に閉鎖せられ恰から囚人に異ならず其出入をなす處には一人の番兵武器を裝し室内少しく騷擾あらば一擊の下に打殺す可き擬勢をなし又妾の居し客室にも番兵一人付添ふて船内不時の事ありし時船客荷物を保護するの任に供せり此番兵甚だ嚴めしき氣にて實用なきが如くなれども實際甚たく必用の者なりといへりそは又何故なるやと尋ぬるに此邊の河中には盗賊夥多徘徊し知らず顏して船客となり航行中途に勃起して船員船客を虐殺し財貨荷物を

掠むると屢ばにて現に此船を持つ會社にても一度此災の不幸に陷り船員船客悉く虐殺せられ船は馬夏の近傍まで押し流されしとありければ扨ては其後ち船内の取締一層心を注ぐなりとぞ頓て進んで伴甲と云へる處を過ぎたるに此處は右傍に嶋を望み左傍は山岳相連らなりて要害最とも堅固なりしが程なく一ヶの砲臺と望めり是なん所謂棒克の砲臺にして曾て我國佛國と盟を固め共々に砲撃なせし痕跡を今尚は其儘に存在せり斯くて廣東最良の船付場伴保にぞ着船せしに妾の乘りし川蒸滊は餘りに積荷の多くして是より上流へは進み兼しが茲にて乘客の半ば過は船より陸に上りければ始めて船も進むを得たりき總て此川筋の岸邊には夫の「サンパン」といへる家屋船幾百艘と

なく舳艫を連らね其外種々の帆船小舟數最と多く見へたりしが中に就ても「サンタリン」と呼べる船は滿船處として彫刻あらざるはなく畵圖彩色を以て之と飾り其美はしきと言ふ計りなく利用の爲めに造くりしならで裝飾の爲め造りたらんと思われけり進んで一の橋下に至れば此舟殊に數多く滿川舳艫を以て埋めたれば船を進めん由もあらず止むなく茲にて上陸し最とも汚穢を究めたる市街を通り一小橋の頭りに來かゝりしに茲には壯大なる鐵關ありて番兵嚴がめしく之を衛もれり妾は此門を横切りて外人の居留地へと趣きしが其途次の街衢は石層又は煉瓦造の樓閣巍々と峙ちで何れも菜圃庭園を備へり道路は草木生ひ繁り鬱蒼として街道を掩へり居留地には我國人の多

ければ最も懇ろなる接待受けぬ此日の午後の三時頃萬錄沈といへる支那人を按內者とし五人均しく五輪の馬車にて市街見物に出で行きたるに途無は車に乘ると止め徐々と徒步して巡覽なさんと主張せしかど雜踏極まる市街の中を步立ちまては步み難しと強て車に乘らしめて鐵關橋の邊りに至りぬそも居留地は一脈の川流繞り流れて一の孤島の狀をなし只一橋もて大陸に僅かに通ずることを得るのみしかも此橋の前後には鐵關巍然と峙ちて番兵嚴かに守衞なし外國人に使用さるゝ支那人にあらざるよりは敢て居留地に入らしめず警戒最とも嚴重なり此の關門を打過て廣東市街を遊覽せしに人民何れも甚く垢つきまぶれ惡臭鼻を穿ちて紛々たりける誰人にても一度支那に遊べる人は廣東市街は支那中にて第一等の淸潔を極むる所と言はざるなきにその廣東の街衢にして既に述べたる如くなれば其餘は推して知る可きなり此市外には安價なる食物店の多かりしが屠人魚商と覺しき人々見るさへ忌ぶせき物を賣れり元來支那人は殊に魚肉を嗜むを以てそが調理にも巧みなるが此處には乾魚を多く堆積したれば其惡臭の浮動すると凄まじく殊に肥料の川に充つる魚類を賣るものゝ夥多ありて木桶棍棒以て擔ひ步き一度之に遇ふ時は嘔氣を催ふす計りなり是より佛國領事館を訪たるに領事は甚だ打喜ばれ珍寶奇玩などを妾に示し其他珍談奇事など語り出られ手厚き款待受けたりける頓て茲をも辭し出でゝ漏斗を見なんと馬を驅り程なく漏斗塔の下に

至りしが此寶塔は紀元六百二十四年より九百七年間の建設に係り一千八百五十七年英佛同盟の砲丸を雨の如くに蒙りたるも今尚は依然と存在せり此に續ける巷街は寶街と呼べる街衢にして廣東市街のその中にて第一等の地位と占めたり此街にては多くの店に「モエ」線と賣り捌きたり此の「モエ」線といへるものは線頭に點火して時間を計るものにして價は最とゞ安けれど製造至つて精密なりては紀元前數百年より既に支那の人々の慣用なせるものなりとぞ是より鳥市を遊覽せり支那人は小鳥を愛すること甚しく他行をなすとあるときは籠に移して之を携へ出入必らず傍を離さず尚は歐人の洋犬を賞ずる如くなれば其が賣買も亦た最と盛なり此より屠塲に至り見るに鼠の尾を削る

ものあれば猫の皮を剝ぐものあり犬羊の骨牛馬の蹄處狹き迄堆積せりこの近隣に鳥巣汁を賣る街あり妾へ其内重立てる店に至り見けるに勘定方の後の方に美服を着せし二三の人々頻に鳥の巣を整へ居たりしが其の最上等の巣汁は純白色の液汁にして其の價直は一圓余次は赤黑色より羽、苔、などの雜りたる等に至るまで上中下等の數種に分ち下等は凡そ二拾五錢に下れるとか是れ又支那人の飲料にして尙は我が「ソップ」を須ゆるが如くなりとぞ是にて此日は旅館に歸へり翌朝日記を書居たるに一人の支那婦人旅館に來りしが元來支那の風習として婦人は足の小さきを貴み故さらに之を鉗制しその成育を妨げて極めて小やかならしむると聞きたりしに今此の婦人の足を見るに果して

聞きしに違はず歩むときさへ覺束なかりき假令其國の風習とはいへ實に哀れむ可きの至りなり三月五日知己朋友に告別し再び川蒸滊船にて香港に下り種々の物産購ひ求め本船三徹無へ乘り組みて馬夏を向ふて進行したりそも此の港は同名の半島の端に列りて葡萄牙人之を見出し始めて植民なしたるが今は我國の版圖に歸しけり此港往時は繁榮を極め大廈高樓も多かりしが一朝大風に吹き摧かれて今は影さへ留めずあらぬ姿は累度加毛然斯氏の庭園を訪しが氏は葡萄牙の一大詩家にて數ば蒙路人と戰爭し諸所に放逐されしが今の所に謫居ひて「ルシアツ」となん云へる詩を作りて一時に名聲を赫かしめたり八日に茲を解纜し新嘉玻に向ひたり

第十五回　浮屠足跡印二峯頭一　豪傑鐵鎖猶依稀

三月十七日新嘉玻の沖に着し翌日上陸したりしに茲は熱帶の事にしあれば見馴れぬ草木の生ひ繁り土人は馬來種といへる銅色ある人種にして白帽を戴き下衣を着けたり又馬土刺斯地方より移り來れる印度人の多く住めるありて白き繻子の如き衣を着け若き女はそが中にても最と奇麗やかに裝飾し指には夥多の指環を着け鼻をも金銀の環と以て裝飾し腕足など隙なき迄に金銀をもて飾りたれば偶ま歩みを移すとあれば佩環鏗鏘として地上に響けり此地の知事維爾利亞烏路斯君に面會せしが途無は羅克買小學校より於克斯不土大學校迄始終螢雪を共にせし最と

親交の友よしあれバ互に胸襟を打開きて語り合ける是れより植物園を遊覧せしに何れも熱帯の草木なれば目に觸るゝ物悉く珍花異草ならざるはなく實にも非常の愉快を極めぬ夫より菓實魚類杯の市場を遊覧なせしに何れも皆な熱帯の異物にして大に耳目を悦ばしめけり此の近海に一種の小舟ありて浪荒立てる太洋を百里乃至五百里間を苦もなく漕ぎて渡れるとぞ此種の舟に乗るものは擧家悉く一船に乗りそが地方の産物禽獣菓實樹木の類を搭載し諸所の港を漕ぎ廻はり鐵類布帛玉石杯と交易しそが生業をなせりと言へり十九日に此處を出で錫崙嶋へと向ひけるが頓て馬剌加海峡へとぞ掛りしに折節し満月輝きて熱帯地方の山川を照らし出せる好風色は實にも目新ら

しく覺へたり斯くて晝夜の分ちなく印度洋とば走りたるに廿九日の暁頃に錫崙島の西南端加列路灣に投錨なしけり此の港の美麗なるは世界第一と迄賞揚せられ古代の建築遺物など新たに建てし建造物と共に各所に峙ちて白壁掩ふ椰子樹と映ろい合ひける好風色は畫圖一幅を掛たる如く中々筆紙の寫す可きにあらず此の錫崙と云へる嶋は彼の世に名を得たる釋迦佛の出生なせる處にて彼の佛教を創始して東洋諸國を濟度せしそが基本の嶋にぞ有ける斯くて妾は上陸し東洋旅館といへる旅亭に泊し翌日宇克和利と云へる小丘に遠乗りを試みしに沿道樹木の繁茂して最とも美景をなせる様は他比丁以来諸國にても未だ見得ざる所と覺へぬ頓て丘山より觀下するに平野森林遠く

連なり遠近諸山は依稀として白雲の間に出没し風光明眉言はん方なし又彼方なる林木の緑と燃せしそが中に一群の白鶴丹頂を集めて遊び居たるは實に限りなき奇觀なりけりそも此嶋は玉石の研磨模造に巧みなるは普ねく人の知る處なるが妾等の遊觀の途次幾人となく出て來たり玉石などを懐に取り購なひ呉れよと求めしかば試に其價を問へば百圓なりなど聞くも可笑しき誇言と吐けり然れど僅かに四五錢を與ふれば歓び領きて受取り收めり此日暮頃に解纜し翌日十時に昆崙冐の港にこそは着したりけり（此港は加列路港の北方にあり）此處は同じき嶋にても歐州模せし都會にして家屋美麗に園囿廣く殊に塞底に至る鐵道線路は世界無双の美觀なりと世に賞へられける名に背か

ず實に此上なき壯觀なりけり尚ほ内地を旅行せしに一溪流の上流に一人の歐人裳を褰げ何にか頻りに物探りして餘念もあらざる様なりけるがこは素と我國の人にして近頃此地に移住して專ら寶石美玉を拾ひ一生涯を了らん覺悟なりと已に妾の遇ひし時にも數多の寶石を拾ひ居りぬ元來此の川筋には碧玉紅晶の屬流出し偶ま大陽の光りを受くれば閃々として眼を眩せり左れば遊人の戯れに寶石拾ひを催すときは實に愉快なる樂にして時には紅水晶、金剛石、紫石英、などを拾ひ得るとかや又或る日亞當の峯に登らんと立出て頓て麓に到着せしが崎嶇羊腸峻險なる攀ぢ得可くとも思へざりしが漸くにして頂きに至れば一ケの佛寺と一ケの馬哈土の堂宇を建てたるあり茲に最と珍ら

しきは大人の足跡にて未だ何人の足跡あるやを知る可らず今佛教信徒の說によれば耶蘇紀元前三四百年の頃釋迦登山の跡ありと云ひ又馬哈土教派の說によれば亞當樂土を逐ひ出されて此に來りし其時の足跡なるに違ひあらじと主張して未だ眞僞を分たずと云へり此山上には數條の鐵鎖を引渡しけるがこは禮拜者登山者などの上下に足の疲れたると助け得させん爲めなりとぞ此鎖は亞歷山皇帝の印度を攻擊せし節に此山上に登り見て其が峻險を救はん爲に設けたるものなりとなん此地は熱帶の事にしあれば猛獸惡虫多き中にも取り別け毒蛇の害多く往々人をも害したりしが人類進化にや恐れけん近頃漸く蟄息し時々鼠と捕へん爲めに人家に忍ぶ事ありとぞ曾て妾の旅館にても天井最とも騷がしきことのありしが是なん蛇蝎の鼠を捕らへける時ありと聞き最と心憂く思ひたり斯くて諸方と遊覽し四月五日に纜解きて亞丁さして船を進めぬ

第十六回

白象乘レ人沙漠裡
尖塔衝レ雲曠野間

四月十四日午後九時に亞剌比亞の南端にして紅海の入口なる亞丁灣に着したるが兩岸亞剌比亞亞弗利加の山々雲霄に拔ん出て風光實に絕奇なりし十六日に埠頭にのぼり始めて土人を目擊せしに面貌黑く髮長く恰がら布帛と丸めし如く衣服は赤色又は黃色にて其風俗の奇怪なる誠とに不可思儀の至りと云ふ可し妾は歐州館といへる旅亭を以て旅館と定けるが此旅亭は海灣に臨みて建築せしかば

滊船の出入一目に見渡し風光最とも佳絶なりけり翌日騎馬して亞丁の市街各所を見物せしが兵營寺院など壯觀ならずと云ふにはあらざれど何れも荒蕪の土地に屹立し一樹一草とも留めざれば最と荒れ果てたる樣なりし其土質は全く火山の灰より成りければ少しく肥料を施こし培養其道を得るときには植物忽ち繁茂す可し是より十里を隔てし地には穀果繁熟川流のそが中央を貫ぬきて運輸の便りも自由なれば亞丁市街の需用に充つる穀物菓實は悉く此處より供給なすといへり十六日此の港をば船出して翌日馬波滿傳海峽一名涙の門と越へけり此處は海潮あらくして破船の災ひ多かりければ涙の門とは名づけしなり左れど妾は恙なく此の海峽とも打過ぎて紅海までそは進航

しけるが其名の紅に似氣もなく蒼波渺々たる海原にて折節濃霧の降り籠めたれば世にも名高き馬加の市街志奈以山とも見分かざりしは最と惜しくこそ覺へたり左れど夫の以津連來人の此の海を神の冥助に力を添て辛くも横切り航りけるなどの故事は坐ろに思ひ出にけり廿五日始めて蘇士の市街に上陸せしに峯巒岩石砂礫の外只一物も眼に觸ず頓て運河會社に趣きて翌日運河を航行せしが妾は中途にして上陸し陸路改羅府に（此府は亞弗利加埃及の首府なり）趣きけるが妾八年の昔茲に遊びし其頃とは大に形を異にして當時は不毛の曠野なりしも今は穀物繁熟せり左れば此後此府の繁榮推し計られて頼もしかりける廿八日改羅の市街を通過して尼羅の鐵橋渡り過ぎ「ゼチン」の宮殿彼方に見做し

て進み行きたりしゝ數多の小兒寄り集ひて象の働き見てありけるが彼方を指さし妾等に尖塔彼處ゝ見ゆと申せしかば道を速めて馬を驅り程なく尖塔の傍へゝ出にけるそも此の尖塔は何れの世誰人の手ゝ成りし者かそれさへ確と分ち得ざる石もて疊める大功碑にて數千年の其間天變地異にも拘はらで尙は今日に自若たるは造化の効を凌ぐとや云ふ可きか尙ほ是より亞歴山に趣て弁平の旌効柱克列巴刺の磁針を見たりき始め妾三微無と玆ゝ會する約束ありしが果して先着なし居ければ此より歸國の用意を整へ急ぎ出發なしたりぬ

第十七回　紅燈靑波輝二滿灣一　砲聲觀呼祝二歸鄉一

斯くて地中海ゝ浮みたりしが風浪甚たく荒立ちて船も自由と得ざりしが五月五日ゝ漸くゝ風浪靜かにありしかば瀛力を增して進みけるに八日に至り馬耳多嶋の列多港に船を留めぬ妾此嶋ゝ遊びし事既や數十回に及びければ恰から我國に歸りし如く最ど心安くぞ覺えけり此嶋は東半球三大陸の境界ありとも言ふ可き所にして地理形勢より論らへば先づ亞弗利加と申す方穩かある可く又た土人の習慣風俗家屋など悉く是れ亞細亞に異ならず見受られ亦政略上より之を考ふれば歐羅巴の如く思はれたり此日船中悉く水夫あどゝ至る迄皆な一同に休暇を與へ長途の勞を慰せしめけるが塗無は此港に碇泊なせる撒丹號を訪づれて亞丁堡の候ゝ謁し候も亦た我三微無を見あれと鵞を

枉られける十日に此處を拔錨し馬耳多嶋をば後邊に見なせり妾は長き月日の其の間山なす濤に苦められ今此地中海を經航るは席の上を步むが如く最と心地よくぞ覺へたりぬ十四日曉過ぎ船は輝やく朝日と共に緑林の子午線を波を蹴立てゝぞ走り過ぎけり是れなん即ち目出度も世界を一過なせしあれば船中一同歡び合ひて各祝意をぞ述たりけり十六日耳巴拉他の海峽過ぎて再び太平洋に浮み出しが風浪意外に荒ければ一時里昂に上陸し例士加毛然斯氏の美麗なる肖像など遊覽し十八日に此處を出て佛國西班牙の間なる美圭灣を横斷て英岙にてこそは安着なしぬ廿七日我國甲斯の港に上陸し歸國の電報書狀を送り再び船に乗り組みて平斯傳に向ひたり此時妾の豫想にては明日

正午頃ならでは平斯傳に着すまじと左るに船をも故郷の慕はしきまゝ急ぎけるにや此日夜半に着船したりしに本國知己の人々は此深夜にも拘はらで無數の小舟無數の球燈晝も欺むく計りにて妾が船まで迎ひ出手に／＼荷物を運搬し程なく上陸したりけるに迎ふる人は山の如く半面識なき人々までも共に長途の無事を祝し歡聲埠頭に湧出ける斯く萬里の波濤を越へて恙もあらで歸へれるのみか出入共に諸人に愛しまれし光榮ハ實に上帝の冥助ありと幾度かこそ伏し拜みぬ

明治十九年五月一日版權免許
仝　年　六　月　出　版

定價金七十錢

譯述兼出版人　芝區三田二丁目二番地 慶應義塾寄留
德島縣平民　内田彌八

發兌元　東京日本橋區本石町貳丁目十六番地
上田屋

府下賣捌所

京橋區南鍋町　天狗書林兎屋
同區銀坐四丁目　博聞本社
日本橋區橘町　鶴聲社
京橋區銀坐　山中喜太郎
同三丁目　稻田政吉
同　昇榮堂

同二丁目　山中孝之助
仝區南傳馬町三丁目　中川仁三郎
仝二丁目　辻本支店
仝二丁目　叢書閣
仝　赤澤清英堂
仝　吉川半七
仝　青陽堂

仝松山堂
日本橋區通四丁目枕屋伊兵衛
仝三丁目丸屋善七
仝丸屋鐵二郎
仝後凋閣
仝開成堂
日本橋通二丁目山佐屋佐兵衛
仝通一丁目須原屋茂兵衛
仝いろはや新造
仝大倉孫兵衛
仝伊勢屋金次郎
仝本材木町自由閣
仝本町二丁目柳川梅次郎
仝三丁目みづはや
大傳馬町二丁目杉本七百丸
仝大阪町法木徳兵衛

仝旅籠町袋屋龜二郎
仝通油町水野慶二郎
仝横山町出雲寺萬二郎
仝二丁目内田彌兵衛
仝文事堂
仝三丁目辻岡屋文助
仝兩國吉川町嶋屋一助
仝藥硏堀町鈴木喜右衛門
仝若松町榊原友吉
仝馬喰町二丁目山口屋藤兵衛
仝森屋治兵衛
仝濱町二丁目高崎修助
芝區三嶋町山中市兵衛
仝宇田川町内野屋彌平治
仝牧野吉兵衛
仝三嶋町萬屋吉兵衛

仝愛宕下町四丁目須原屋富吉
仝文開堂
仝露月町米倉や
仝神先治郎助
仝愛宕下町二丁目千葉小治郎
仝芝口二丁目二三屋三二
仝一丁目龍淵堂
仝烏森町金章堂
芝區櫻田本鄉町金麟堂
仝新櫻田町文祥堂
仝愛知堂
麻布飯倉三丁目武內利兵衛
仝五丁目鈴木忠藏
麴町區麴町二丁目文海堂
仝三丁目磯部屋太郎兵衛
神田區小川町東洋館

仝表神保町澤屋蘇吉
仝小川町中西屋邦太
仝雉子町畿々堂
仝團々社支店
仝鍛冶町北辰堂
下谷區仲町岡村庄助
神田區松住町嶋屋半七
下谷區五軒町和泉屋武之助
淺草區茅町須原屋伊八
仝須賀町松崎半造

諸府縣賣捌所

大坂三木佐助
仝梅原龜七
仝駸々堂
仝岡嶋眞七
仝仝支店

京都 出雲寺文次郎
仝 川勝德次郎
仝 大黒屋太左衛門
新潟本町通六番町 櫻井產作
仝東堀通五番町 林留吉
仝古町通二番町 井筒駒吉
仝七番町 佐藤庄八
仝 小林次郎
越後長岡 目黒十郎
仝 山口萬吉
仝 佐藤作平
仝 松田周平
仝 覺張治平
新津 中村政次郎
仝葛塚 弦巻七十郎
水原 西村六平

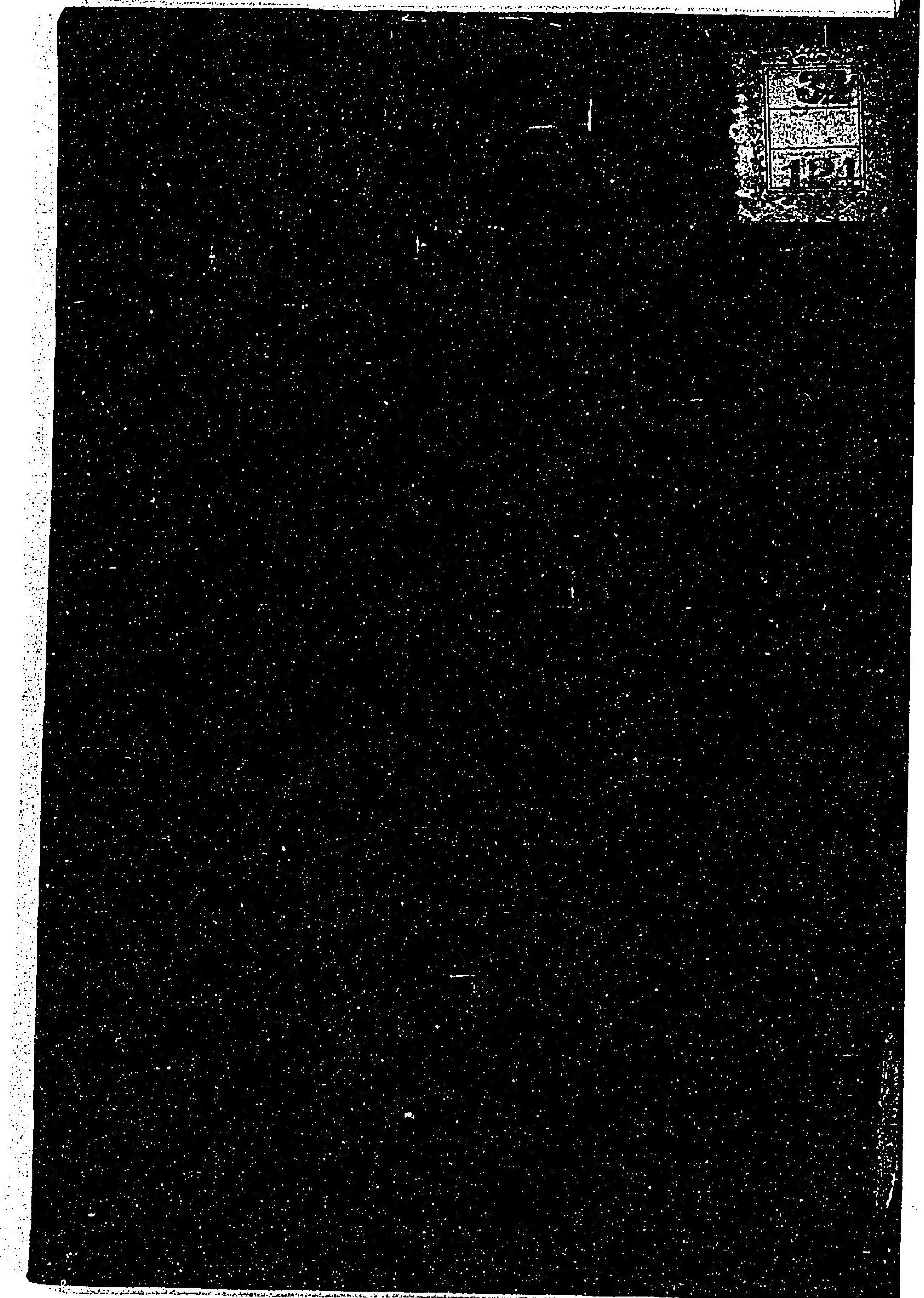
仝 仝鐵二郎
柏崎 高桑小兵衛
三條 樋口小左衛門
六日町 目黒宗內
高田 室直三郎
仝 本多勝太郎
四ッ谷濱村 佐藤友吉
地藏堂 伊丹屋藤吉
越後新津 阪瓜巖太郎
信州長野 西澤喜太郎
仝松本 多賀美屋
相州小田原 大島次郎兵衛
伊豆三嶋驛 村上留次
奥州仙台 部阿勘右工門
二本松 齋藤繁太郎
三州豊橋 天野重助

函館大町 常野嘉平
函館 細澗重吉
橫濱元町四丁目 高橋安五郎
羽前山形 素月晨平
仝 荒井清作
靜岡傳馬町 喜多川屋茂右衛門
仝吳服町 文正堂
名古屋 永樂堂東四郎
仝 三輪文次郎
水戸泉町 柳亘堂支店
津輕 野崎九兵衛
羽前山形 田宮五郎
羽前客池 八文字屋
肥前 長崎次郎

[illegible]

[illegible]

34
124



022330-000-5

34-124

婦人地球周遊記

ブラッセー／著

M19

ADA-0848